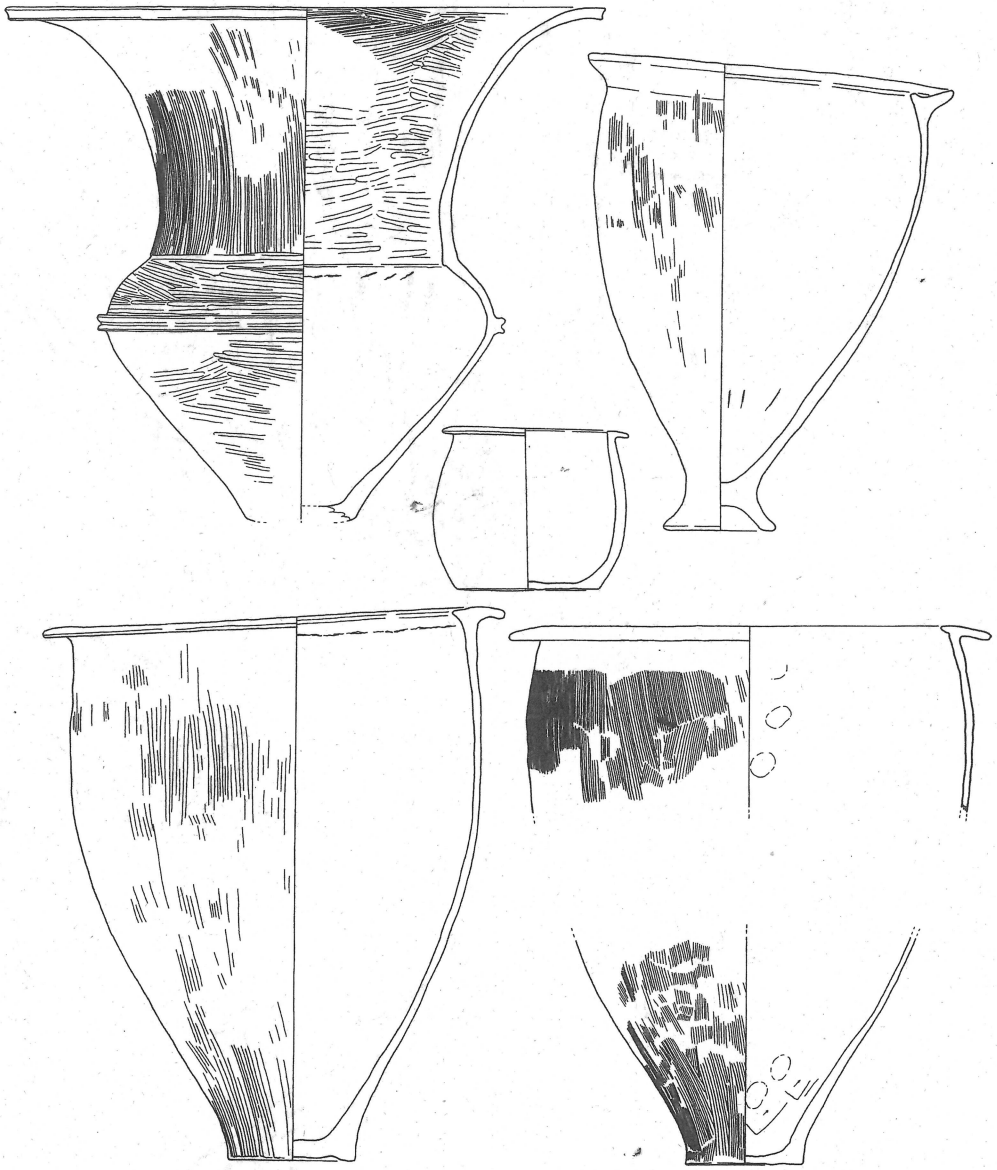
国見町文化財調査報告書(概報)　第５集

十園（じゅうぞの）遺跡 Ⅱ

－国見町多比良（たいら）地区町営圃場整備事業に伴う発掘調査概報－



４区 SB02出土土器（33～34Ｐ）

２００５

長崎県国見町教育委員会

第２節　50区 SD01出土土器（第58図～第67図　図版32～33）

１）出土土器の数的検討

検出された土器群は，すべてが破片資料で，完全な形に復元できるものはみられない。

十園遺跡では12～14区においても，ほぼ同時代の直線的な溝（水路）が検出されており，その溝との比較を行うため，破片の大きさについて整理を試みた（第59図）。その結果，12～14区 SD01出土品と50区 SD01出土品には，破片の大きさが異なる傾向にあることが導き出された。50区 SD01の資料は小破片が多く，以下に報告する資料はほとんどが復元実測である。12～14区 SD01の資料は５㎝大の良好な破片が多いため，前回の報告（第４集）では復元実測に頼る資料は少なかった。この差は，二本の溝が埋没した要因が異なることを示唆する傍証のひとつとなる。平面的には（第58図）二本の溝が下流域で結合するという想定は難しい。50区 SD01では覆土の観察（第56図）から埋没・再掘削の過程が導きだされているが，12～14区 SD01は再掘削された様子はない。この点からも二本の溝の埋没が同時期でない可能性が高くなる。遺構間における遺物の接合関係であるが，小型の器種では接合する資料は見られない。しかし，大型の甕片には共通する点が多く（第67図），同一個体となる可能性が高い。この点は二本の溝の掘削時期の前後を決定する材料にはならないが，二本の溝がある時点で同時に埋没していたことを示すものである。二本の溝の問題については遺構の切りあい関係の検討ができる材料がほしいところである。

出土遺物の器種ごとの数量は以下の通り。

土師器・土器の総数353点（※甕胴部片を含まない）

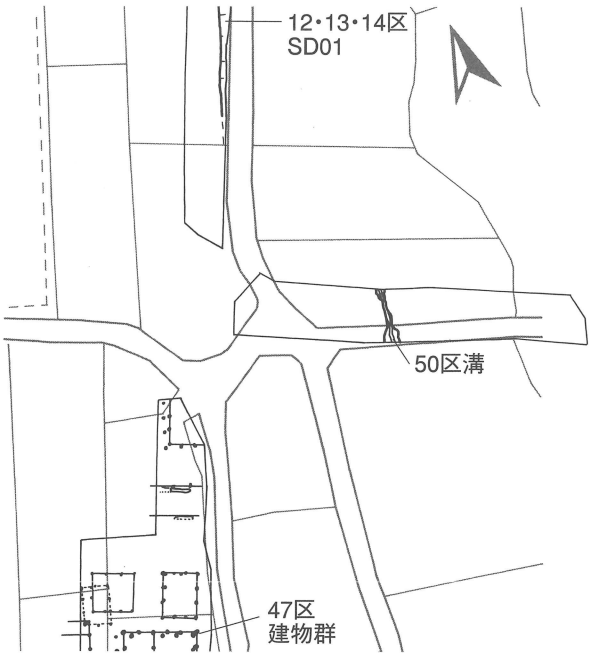
坏類152点（内坏蓋28点）43.1％　甕口縁部片76点（胴部片815）21.5％

甑16点4.5％　その他72点　竈片10点28.3％

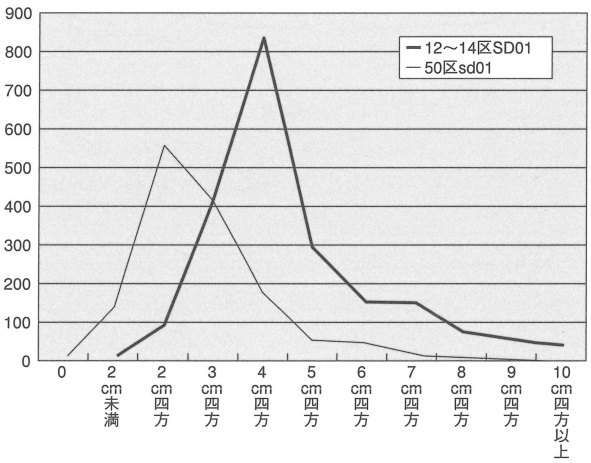
須恵器の総数151点

坏112点（内坏蓋47）74.2％　高坏９点３％　甕27点17％　甑０点　壷11点7.3％

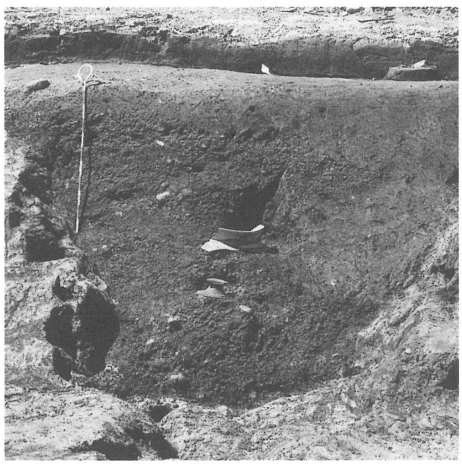
全体では供献具53.2％，煮炊具20.2％，貯蔵具6.9％，その他14.3％となる。12～14区 SD01での数的検討では供献具の次に貯蔵具が多い様相であったが，当遺構では煮炊具が貯蔵具を上回っている点が特徴的である。やはり，器種ごとの統計的な部分でも二本の溝の相違点がはっきりしている。



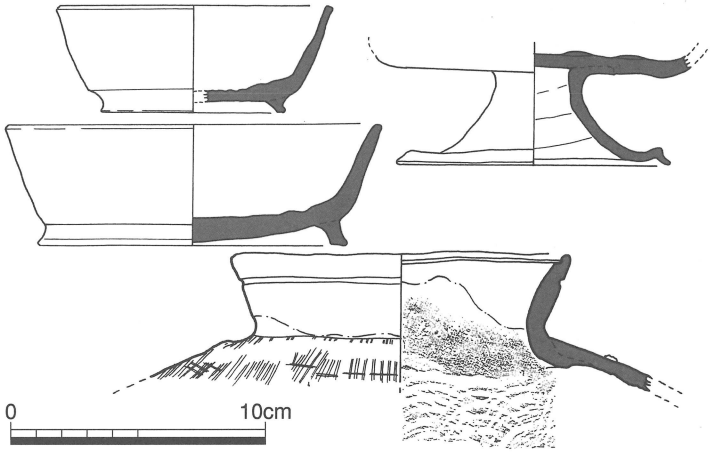
第58図　50区検出の溝配置図（1/1,000）



第59図　破片の大きさ（甕胴部片を含む）



50区溝中位での土器集中

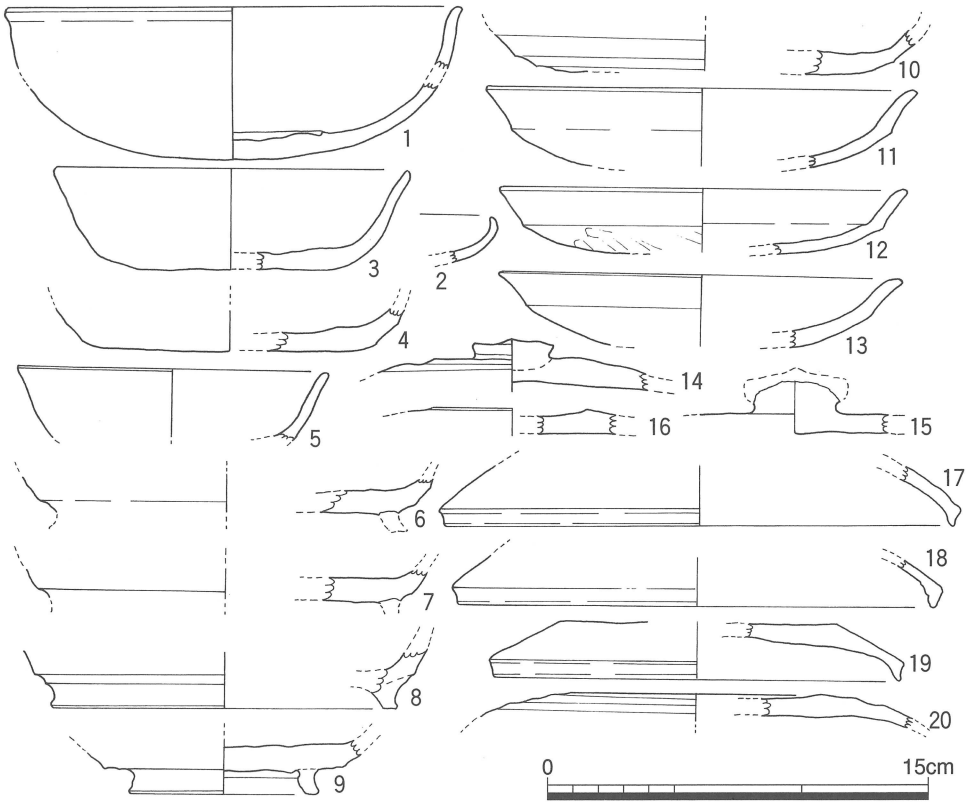


第60図　50区中層集中遺物(1/3)

2）溝に一括投棄された土器群（第60図　写真③　図版32）

個別資料の紹介により詳細な資料検討を行えば，豊富な形態が抽出され複雑な溝の埋没過程と複数の形式にわたる遺構出土品となることが理解できるであろう。ここでは，調査段階で溝に一括して廃棄された一群（上の写真）を取り上げておく。調査段階で覆土中位において大型の礫とともに須恵器甕・高坏・坏などがまとまった状態で検出されている。溝の埋没のある時点で，一括して廃棄されたものと考えられる。第60図はそれらを抽出したものである。接合作業を行わなくとも，須恵器甕以外は6割方残存する資料である。当遺構はこれらの示す時期を中心とした期間に掘削され埋没していったものと考えてよいであろう。

3）個別資料の紹介（50区 SD01覆土中検出の土器片）



第61図　50区 SD01出土土師器(坏・蓋類・1/3)

土師器　坏類（第61図　第21表　図版33）

坏は**1**のように丸底で深みのあるもの，**3**～**4**のように平底のものがある。**1**は内外面にミガキ調整を施し形態的にも古い様相を呈しており，見込みにみられる段が特徴的である。**2**のように口縁部が内弯する形態は古墳時代にさかのぼる例である。

第21表　50区 SD01出土土師器（坏・蓋類）観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土／色調	備考
61	1	土師器 坏(丸底) 接合資料	口縁部直径 (復元径) 18.0 高さ 6.0 内面溝直径 7.0	外面 口縁部～胴部:細かいミガキ 底部:回転利用のヘラ削りにナデ 内面 細かいミガキ調整 直径7㎝の円形の浅い溝1条	緻密できめ細かい 雲母粒子多い 白色粒子 橙(Hue2.5YR7/6･6/6)	
	2	土師器 坏(丸底) 小破片	口縁部直径 (復元径) 15.0 残存高 1.9	外面 細かいミガキ調整 内面 細かいミガキ調整	緻密できめ細かい 雲母粒子･赤白砂粒子 橙(Hue2.5YR7/6･6/6)	
	3	土師器 坏(平底) 6㎝角	口縁部直径 (復元径) 14.0 高さ 4.0	外面 内外面とも摩滅激しい 回転利用の横ナデか？ 内面 回転利用の横ナデか？	角閃石･雲母多い 赤白砂粒子(1～2㎜)多い 石英(1～2㎜)白色粒子 浅黄橙(Hue7.5YR8/4)	
	4	土師器 坏(平底)	底部直径 (復元径) 11.6	外面 底部:回転利用のヘラ削り にナデ 内面 回転利用の横ナデ	角閃石･雲母粒子 白色粒子･赤白砂粒子 (0.2～1㎜)	
	5	土師器 坏身片 3㎝角	口縁部直径 (復元径) 12.4 残存高 2.6	外面 回転利用の横ナデ 内面 回転利用の横ナデ	角閃石,雲母粒子 石英(0.2～1㎜) 白色粒子･赤白砂粒子	
	6	土師器 坏	高台直径 (復元径) 11.6	外面 底面:回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	角閃石･雲母粒子･赤色砂 橙(Hue5YR6/6)	
	7	土師器 坏	高台直径 (復元径) 14.0	外面 内面 摩滅が激しい	角閃石少々,雲母粒子 橙(Hue5YR7/6･6/6)	
	8	土師器 坏	高台直径 (復元径) 13.6	外面 ヘラ削りに横ナデ 内面 回転利用の横ナデ	雲母粒子,角閃石 にぶい橙(Hue7.5YR7/4)	
	9	土師器 坏	高台直径 (復元径) 7.5	外面 回転利用のヘラ削りにナデ 内面 回転利用の横ナデ	雲母粒子,角閃石粒子 橙(Hue5YR7/6)	
	10	土師器 皿 (平底)	底面直径 (復元径) 13.4	外面 回転利用のヘラ削りに横ナデ 内面 回転利用の横ナデ	角閃石,雲母粒子 白色粒子(0.1～0.3㎜) 橙(Hue5YR7/6)	
	11	土師器 皿 (丸底)	口縁部直径 (復元径) 17.0 残存高 3.1	外面 口縁部～胴部中位:横ナデ 底面:手持ちヘラ削りにナデ 内面 回転利用の横ナデ	きめ細かい 雲母粒子のみ にぶい橙(Hue5YR7/4)	
	12	土師器 皿 (丸底)	口縁部直径 (復元径) 16.0 残存高 2.6	外面 口縁部～胴部中位:横ナデ 底面:手持ちヘラ削りにナデ 内面 回転利用の横ナデ	雲母粒子, 白色粒子(0.1～2㎜) にぶい橙(Hue5YR6/4)	内外面化粧 土あり きめ細かい
	13	土師器 皿 (丸底)	口縁部直径 (復元径) 16.0 残存高 2.8	外面 口縁部～胴部中位:横ナデ 底面:手持ちヘラ削りにナデ 内面 回転利用の横ナデ	角閃石多い 雲母粒子,石英,白色粒子 浅黄橙(Hue7.5YR8/4)	
	14	土師器 坏蓋	つまみ直径 3.2 残存高 2.1	外面 回転利用のヘラ削り 内面 回転利用の横ナデ	白色粒子(1～2㎜) 赤色砂(2㎜),雲母粒子 明赤褐色(Hue5YR5/6)	
	15	土師器 坏蓋	つまみ直径 3.2～2.0 残存高	外面 内面 細かいミガキ調整	白色粒子･赤色砂(1～2㎜) 明赤褐色(Hue5YR5/6)	
	16	土師器 坏蓋？	残存高 1.0 段の直径 (復元) 6.0	外面 細かいミガキ調整 内面 回転利用のヘラ削りに横ナデ	赤色砂(1～2㎜)雲母粒子 白色粒子(0.5～1㎜) 橙色(Hue5YR6/6)	
	17	土師器 坏蓋 端部片	復元直径 20.6 残存高 2.4	外面 摩滅が激しい 内面 摩滅が激しい	石英粒子,雲母粒子 赤色砂 橙(Hue5YR7/6,6/6)	
	18	土師器 坏蓋 端部片	復元直径 19.3 残存高 2.0	外面 細かいミガキ調整 内面 細かいミガキ調整	角閃石,雲母粒子,赤色砂･ 白色粒子(0.2～1㎜) 橙色(Hue5YR6/6)	3点の接合品
	19	土師器 坏蓋 つまみ無	復元直径 16.0 高さ 2.2 (復元)	外面 天井部は回転利用のヘラ削り ほかは回転利用の横ナデ 内面 回転利用の横ナデ	角閃石,雲母粒子 赤色砂･白色粒子(1～2㎜) 浅黄橙(Hue710YR8/3)	
	20	土師器 坏蓋 天井部片	直径 (復元) 20？	外面 回転利用のヘラ削りに横ナデ 内面 回転利用の横ナデ	角閃石,雲母粒子, 赤色砂(1～1.5㎜) 白色粒子(0.2～1㎜) 橙(Hue5YR7/6)	

皿は**10**～**13**のような丸底の形態で，口縁部に屈曲を有する形態である。口縁部直径は復元であるが**10**以外は16～17㎝にある。深さはまちまちであるが，3㎝ほどに集中すると思われる。底面の外面調整には手持ちのヘラ削りのあとにナデ調整を加えており，**1**などと技法的に近い。

高台を有する坏は良好な資料が少なく，**6**や**7**は高台が剥げ落ちている。**9**は径が小さいので蓋とも考えられる。高台の残る**8**では，高台の高さは1㎝ほどあり，端部は外側に張り出しており，踏ん張る形態に近い。高台の径は14㎝ほどに復元できる。

14～**15**は天井部片で，**17**～**19**は口縁端部片である。つまみは釦状に宝珠がつぶれた形態である。体部は，**17**や**18**のように深みのある形態と，**19**や**20**のように扁平な浅い形態とに分類できる。**19**の天井部は回転利用のヘラ削りが施されている。**16**は形態不明の資料であるが，蓋として報告しておく。

土師器坏類の特徴：多様な形態があり，複数の形式が存在する。しかし，12～14区 SD01で多く見られた形態は出土していない点と，こちらのほうは口縁部直径が大きく，丸底が多い点を強調しておく。

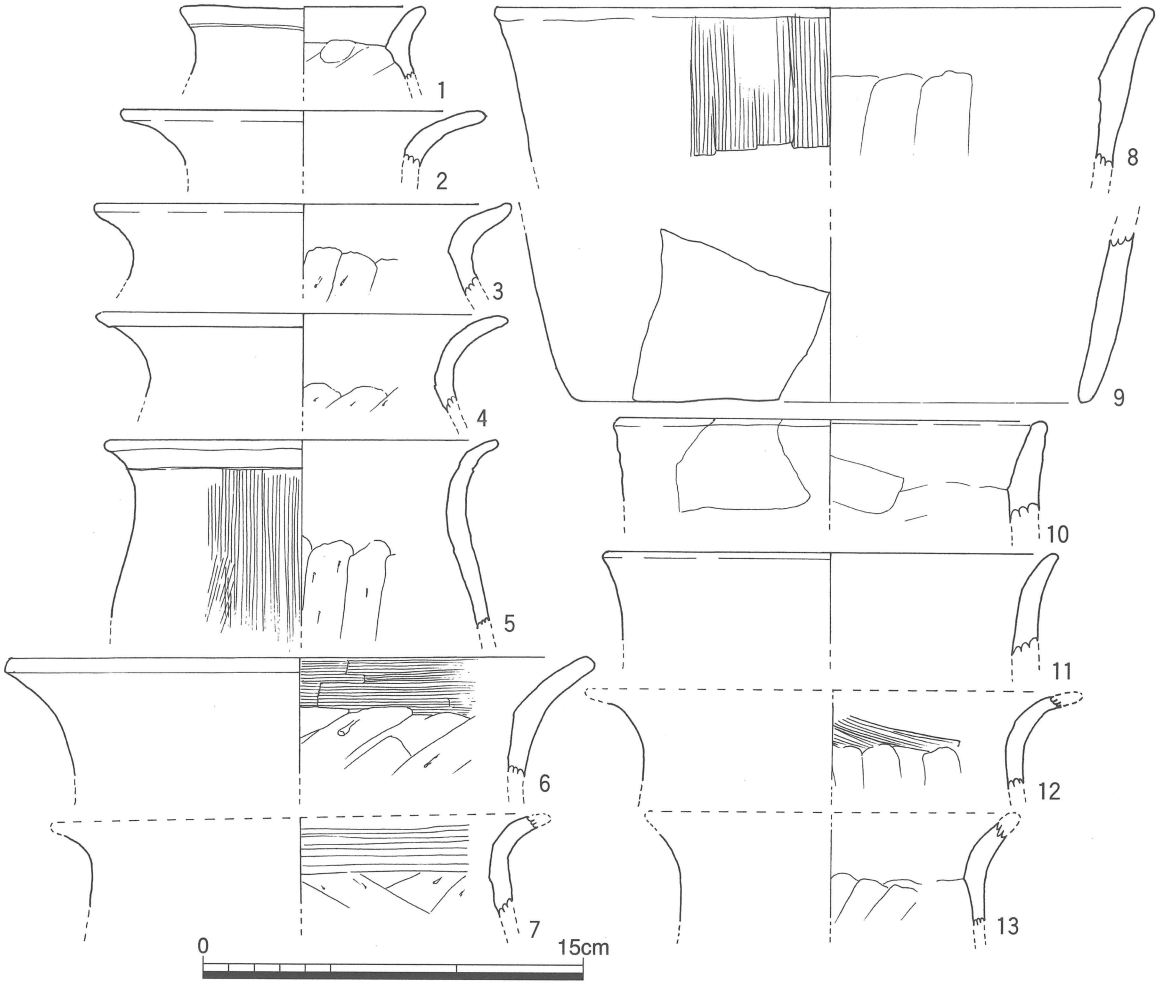
土師器　甕・甑（第62図　第22表　図版33）

1はもっとも小さい甕で口縁部はゆるい「く」の字に開き，復元径は13cmである。口縁部がくの字に開く例がほとんどで，水平に開くものには**7**や**12**がある。胴部形態は**5**でのみ推察できるが，全体的な形態はつかめない。甕胴部片の観察では外面刷毛，内面縦方向のヘラ削りとなる。**10**・**11**は甑口縁部で甕の**6**などとセットとなると考えられる。**8**や**9**は大型で，対応する甕の資料が見当たらない。

土師器甕・甑の特徴：口縁部形態や復元口縁部直径が豊富で，大小の煮炊き具が存在する。

須恵器　坏類（第63・64図　第22・23・24表　図版33）

坏身（第63図**1**～**8**）は口縁部復元径で14～18cmの資料がほとんどであり，端部の調整がシャープな仕上がりをみせるもの（**1**～**3**）と，重厚な仕上がりとなるもの（**5**～**8**）とに分類できる。深さはもっとも深いものが**1**で7cm以上，最も浅いものが**8**で2.5cmとなる。口縁部は**7**で端部外面に溝をもっており，特徴的である。47区 Pit127で出土須恵器坏と共通した特徴となる。



第62図　50区 SD01出土土師器（甕・甑1/3）

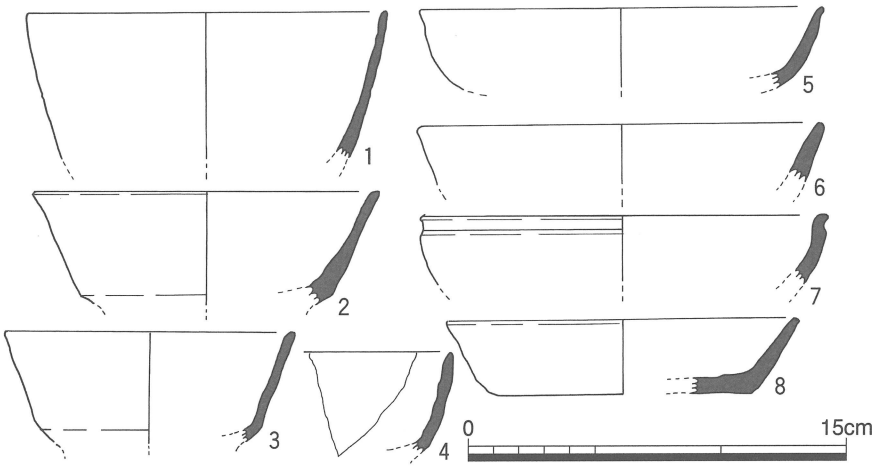
第64図**10**～**12**はかえりを有する坏身片である。本遺構の主流となる形態ではないが紹介しておく。受け部やかえりともに高さも張り出しも弱い資料である。**1**～**8**とは胎土の点でも異なる点が多い。

第64図の高台付坏は，高台径が7～8㎝（**1**～**3**），11～12㎝（**5**～**8**），13㎝（**9**）とさまざまである。高台端部外面は外側に広がる形態で，高さは0.5～1.0㎝までみられる。深さは**4**で4.7㎝，**2**で3㎝，ほかもその間に収まるであろう。口縁端部の仕上がりにはシャープなもの（**1**・**4**）と重厚なもの（**2**・**5**）がみられる。**6**は非常に特徴的な資料で，精緻な胎土で混和材をほとんど含まず，朝鮮無釉陶器や陶質土器によくあるように内部の色調が小豆色を呈している。類似する資料は12～13区SD01でも高台付坏片が2点出土している。

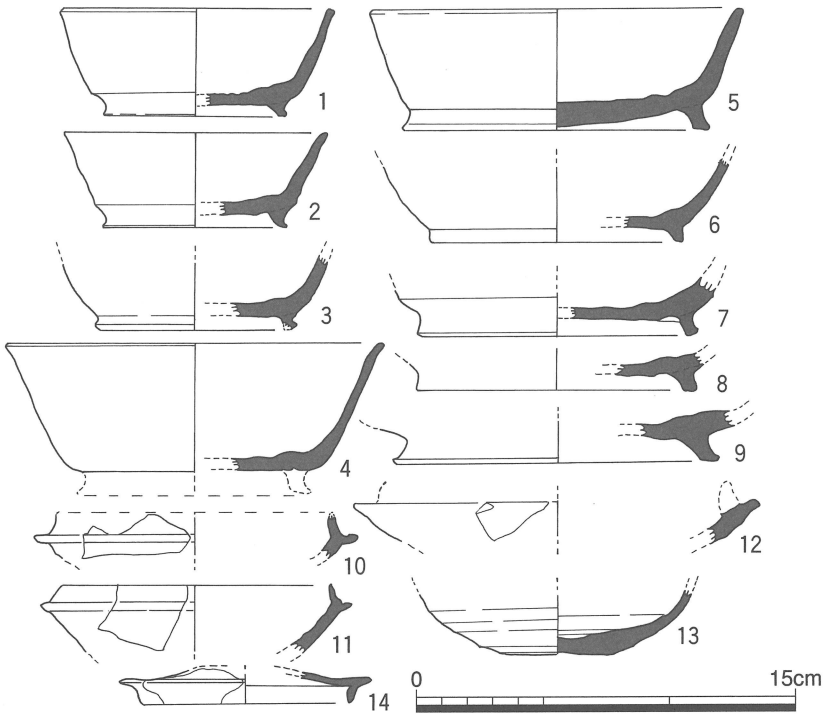
坏蓋（第64図**14**　第65図　第24・25表　図版33）

第64図**14**は宝珠つまみを有すると思われる坏蓋である。本遺構で主流となる形態ではない。

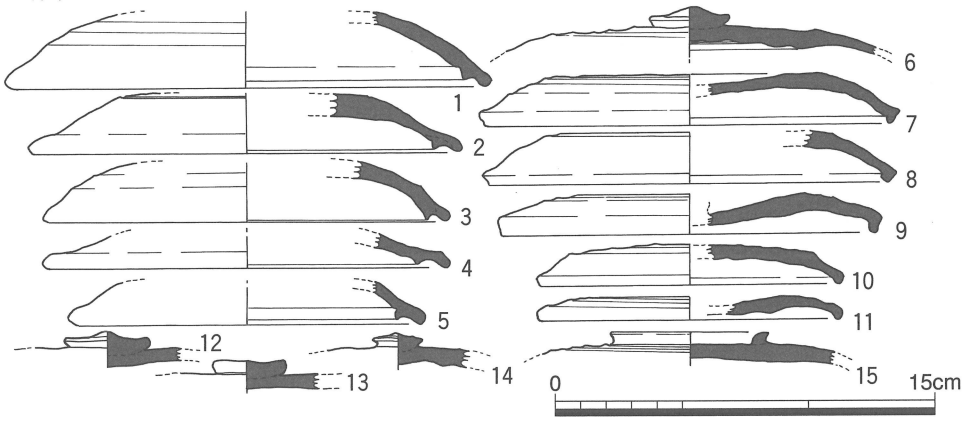
第65図**1**～**5**はかえりを有する坏蓋で，口縁部復元径はまちまちである。**6**～**11**は扁平な釦状のつまみを有する蓋で，口縁部復元径は15～16㎝と12㎝に集中がみられる。**6**～**8**は高さのある形態に復元されるが，**9**～**11**は低い形態である。調整は外面に回転



第63図　50区 SD01出土須恵器（坏・1/3）



第64図　50区 SD01出土須恵器（高台坏・1/3）



第65図　50区 SD01出土須恵器（蓋・1/3）

第22表　50区 SD01出土土師器（甕・甑）観察表，出土須恵器（坏）観察表

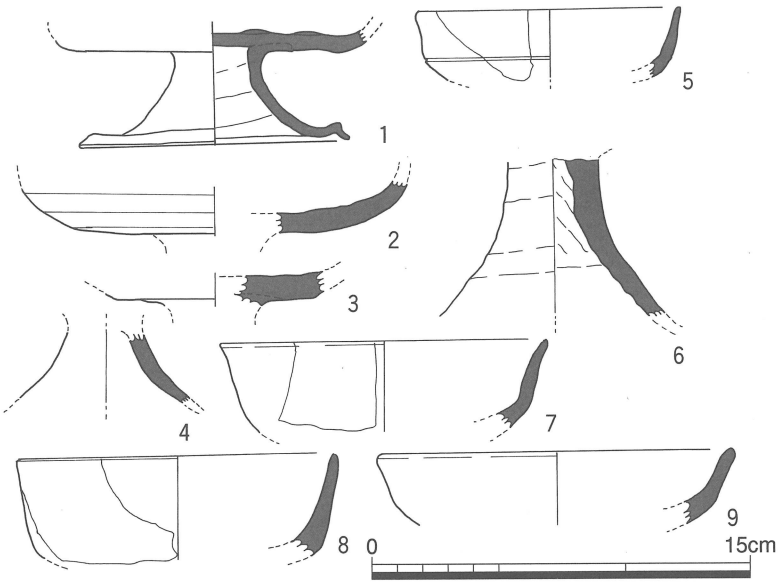
図	番号	種別	法量(cm)		技法的特徴		胎土／色調	備考
	1	土師器 甕 破片	口縁部 (復元) 残存高	13.0 3.8	内面 外面	口縁部:回転利用の横ナデ 頚部以下:斜めの削り調整 口縁部:回転利用の横ナデ	角閃石・雲母多い 白色粒子(0.1～2㎜) 石英粒子(1～2㎜)	接合資料 1/4周する 頚部内径9㎝
	2	土師器 甕 破片	口縁部 (復元) 残存高	19.4 3.0	内面 外面	口縁部:回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	角閃石・雲母多い 白色粒子(1～2㎜) にぶい橙色(Hue7.5YR7/4)	頚部内径 10.6cm
	3	土師器 甕 破片	口縁部 (復元) 残存高	22.0 4.7	内面 外面	口縁部:回転利用の横ナデ 頚部以下:斜めの削り調整 横ナデ調整	角閃石 雲母粒子 白色粒子(1～2㎜) 橙色(Hue7.5YR7/6)	頚部内径 15.2cm
	4	土師器 甕 破片	口縁部 (復元) 残存高	21.8 5.3	内面 外面	回転利用の横ナデ 頚部以下:斜めの削り調整 回転利用の横ナデ	角閃石多い 雲母粒子 白色粒子(0.2～1.0㎜) 浅黄橙色(Hue10YR8/4)	頚部内径 14cm
	5	土師器 甕 破片	口縁部 (復元) 残存高	21.0 20.0	内面 外面	口縁部:回転利用の横ナデ 頚部以下:斜めの削り調整 口縁部:回転利用の横ナデ 口縁部下半以下:縦方向の刷毛目	角閃石 雲母 多い 白色粒子(0.1～0.5㎜)多い 浅黄橙(Hue7.5YR8/6) 外面一部すすける(褐灰 Hue7.5YR6/1)	18cm四方の 破片資料 頚部内径 15.4cm
	6	土師器 甕 破片	口縁部 (復元) 残存高	31.0 6.2	内面 外面	口縁部:横方向の刷毛目 頚部以下:斜めの削り調整 口縁部:横ナデ 頚部以下:縦方向の刷毛目	角閃石 雲母粒子 白色粒子(0.2～1㎜) 灰白(Hue10YR8/2)	頚部内径 22.6
	7	土師器 甕 破片	口縁部 (推定) 残存高	26.5 5.4	内面 外面	口縁部:横方向の刷毛目 頚部以下:斜めの削り調整 横ナデ調整	角閃石多い 雲母粒子 石英粒子(2㎜) 浅黄橙色(Hue7.5YR8/4)	頚部内径 20cm
	8	土師器 甑 破片	口縁部 (復元) 残存高	34.0 8.7	内面 外面	口縁部:横ナデ 頚部以下:縦方向の削り調整 縦方向の刷毛目	角閃石 石英粒子(1～3㎜) 赤色砂粒子 白色粒子(1～2㎜) 浅黄橙色(Hue7.5YR8/3)	頚部内径 28.4cm
	9	土師器 甑 底部片	底部 (復元) 残存高	27.0 8.7	内面 外面	斜め方向の削り調整＋横ナデ 縦方向の細い刷毛目	角閃石 雲母粒子 赤色砂粒子 白色粒子(0.1～0.5㎜) 浅黄橙(Hue7.5YR8/4)	
	10	土師器 甑 破片	口縁部 (復元) 残存高	22.8 5.4	内面 外面	口縁部:横ナデ 頚部以下:斜めの削り調整 横ナデ	角閃石 雲母粒子 白色粒子(0.2～1.0㎜) 橙色(Hue7.5YR6/6) 内部は褐灰色(Hue7.5YR6/1)	
	11	土師器 甑 破片	口縁部 (復元) 残存高	24.0 5.3	内面 外面	横ナデ 横ナデ	角閃石 雲母粒子 白色粒子(0.2～0.5㎜ 2㎜) 橙色(Hue5YR6/6) にぶい橙色(Hue7.5YR6/4)	
	12	土師器 甕 破片	口縁部 (復元) 残存高	25～26 4.8	内面 外面	口縁部:回転利用の横ナデ 斜め刷毛目＋横ナデ 頚部以下:縦方向の削り調整 口縁部:回転利用の横ナデ 頚部以下:縦方向の刷毛目	角閃石多い 白色粒子(1～0.5㎜) 赤色砂粒子 橙色(Hue7.5YR7/6)	頚部内径 18cm
	13	土師器 甕 破片	口縁部 (復元) 残存高	20.0 5.2	内面 外面	口縁部:回転利用の横ナデ 頚部以下:斜めの削り調整 ナデ調整	角閃石多い 雲母粒子 白色粒子(0.2～1.0㎜) 石英粒子(1～2㎜) 浅黄橙(Hue10YR8/3)	頚部内径 14cm
63	1	須恵器 坏身片	口縁部 残存高	14.0 5.7	内面 外面	回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.5㎜) 灰色(HueN4/～6/)	深い形態
	2	須恵器 坏身片	口縁部 残存高	13.6 4.4	内面 外面	回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.5㎜) 灰色(HueN5/)	内部は灰赤 (Hue2.5YR6/2)
	3	須恵器 坏身片	口縁部 残存高	11.6 4.3	内面 外面	回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.3㎜) 内:赤灰(Hue2.5YR5/1～4/1) 外面:灰(HueN5/)	内部h青灰 (5BG 6 /1) 薄い器壁
	4	須恵器 坏身片	破片資料 焼け歪み有		内面 外面	回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	黒色粒子(0.5～0.7㎜)白色粒子 灰色(HueN7/)	外面は自然釉
	5	須恵器 坏身片	口縁部 残存高	16.0 3.2	内面 外面	回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	黒色粒子(0.1～2㎜) 灰白(HueN7/)白色粒子(0.1～1㎜)	浅い形態
	6	須恵器 坏身片	口縁部 残存高	16.0 2.4	内面 外面	回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.3㎜)雲母粒子 灰白(Hue2.5YR7/1) 黄灰(Hue2.5YR6/1)	厚い口縁部
	7	須恵器 坏身片	口縁部 残存高	16.3 2.7	内面 外面	回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	黒色粒子(0.1～2㎜) 灰白(HueN7/)白色粒子(0.1～1㎜)	浅い形態 開く口縁部
	8	須恵器 坏身片	口縁部 残存高	14.0 3.0	内面 外面	回転利用の横ナデ 回転利用の横ナデ	黒色粒子(0.1～2㎜) 灰白(HueN6/)白色粒子(0.1～1㎜)	浅い形態 開く口縁部

利用のヘラ削りを多用していることはいずれでも共通している。**12**～**14**は扁平な釦状のつまみをもつもので，**15**は輪状つまみをもつ資料である。

高坏（第66図　第25表　図版33）

1は大変シャープなつくりで端部の仕上がりも鋭く，器壁も薄くつくられる。それに対して**2**・**3**・**7**～**9**は重厚なつくりである。**5**・**6**は古墳時代末にさかのぼる資料であろう。

須恵器坏類の特徴：多様な形態があり，複数の形式に分類できる。とくに端部調整や削り調整の如何による器壁の厚さなどの違いにより分類が可能である。12～14区 SD01と比べると形態的にやや大きいものが多い。

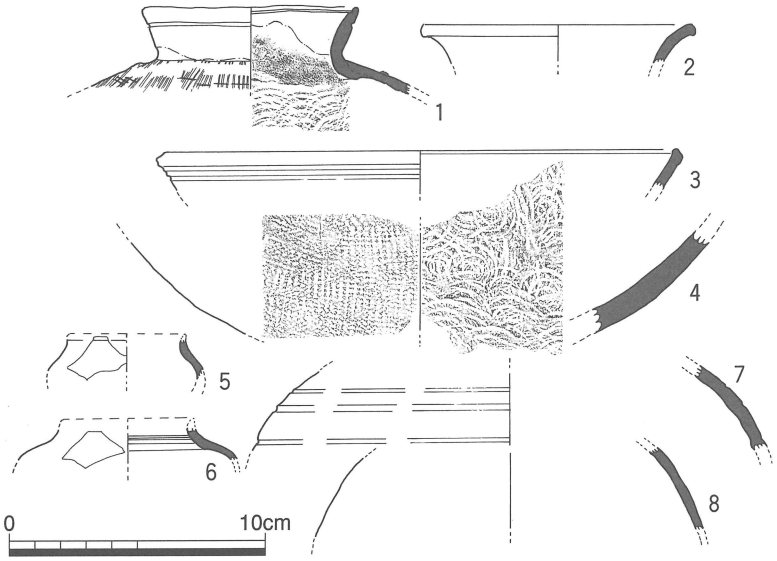


第66図　50区 SD01出土須恵器（高坏1/3）

須恵器　甕・壺類

（第67図　第25表　図版33）

甕は大きさが，小型のもの（**1**・**2**），大型のもの（**3**・**4**）に分類できる。口縁部は単純な形態を示し，外面に沈線を１～３条施している。**1**は口縁部が半周する資料で，自然釉がかかり，頸部内面はふくらみ，それ以下は叩き調整により器壁が薄くつくられている。



第67図　50区 SD01出土須恵器（甕・1/4）

4は大型品の底部近くになると思われ，内面は同心円当具痕，外面には擬格子叩き痕がみられる。

壺には，小型の短頸壺２片（**5**・**6**）とサイズの大きい胴部２片がある。**7**は外面に凹線がほぼ等間隔に３条施されている。**8**は非常に特徴的な資料で，精緻な胎土で混和材をほとんど含まず，朝鮮製無釉陶器などのように内部は小豆色を呈する。内外面の調整は丁寧なナデ仕上げである。

須恵器甕類の特徴：小型と大型の甕に復元でき，**4**は特に大型の部類に含まれる。

第23表　50区 SD01出土須恵器（高坏）観察表

図	番号	種別	法量(cm)		技法的特徴		胎土／色調	備考
64	1	須恵器 坏身 高台付 破片	口縁部 高さ 高台径 高台高	10.6 4.2 7.0 0.5	外面	口縁部～胴部:回転利用の横ナデ 底部:回転利用のヘラ削り	白色粒子(１～２㎜)石英(１㎜) 黒色粒子(１～３㎜) 内面:青灰(Hue10BG5/1) 外面:明青灰(Hue5B7/1)	
					内面	回転利用の横ナデ		
	2	須恵器 坏身 高台付 破片	口縁部 高さ 高台径 高台高	8.4 3.8 7.2 0.5	外面	口縁部～胴部:回転利用の横ナデ 底部:回転利用のヘラ削り	白色粒子(0.1～0.5㎜) 黒色粒子(0.5㎜) 灰(HueN6/) 外面に自然釉(前面)	
					内面	回転利用の横ナデ		

第24表　50区 SD01出土須恵器（坏・蓋）観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土／色調	備考
64	3	須恵器 坏身 高台付 破片	口縁部　10～11 残存高　2.8 高台径　8.0 高台高　0.5	外面　口縁部～胴部:回転利用の横ナデ 底部:回転利用のヘラ削り 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～2㎜)多い 黒色粒子(0.3～0.5㎜) 内外面:灰(HueN5/)	
64	4	須恵器 坏身 高台付	口縁部　14.8 残存高　5.0 高台径　8.8	外面　口縁部～胴部:回転利用の横ナデ 底部:回転利用のヘラ削り 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.3㎜) 黒色粒子(0.1～2㎜)多い 内外面:灰(HueN7/)	高台破損 破片
64	5	須恵器 坏身 高台付 2/3残存	口縁部　14.6 高さ　4.8 高台径　12.0 高台高　0.9	外面　口縁部～胴部:回転利用の横ナデ 底部:回転利用のヘラ削り 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(1～2㎜)雲母粒子 石英(1～4㎜)多い 角閃石(1～2㎜) にぶい赤褐色(Hue2.5YR5/4)	
64	6	須恵器 坏身 高台付	口縁部　3.2 高台径　10.0 高台高　0.5	外面　丁寧な横ナデ調整 内面　丁寧な横ナデ調整	白色粒子(0.1～0.3㎜) 内外面:灰色(HueN5/) 内部:灰赤(Hue7.5YR6/2・5/2)	大変緻密な 胎土 破片
64	7	須恵器 坏身 高台付	口縁部　2.3 高台径　11.2 高台高　0.6	外面　高台外:回転利用の横ナデ 底部:回転利用のヘラ削りにナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.3㎜)多い 内外面:灰(HueN5/・4/)	破片
64	8	須恵器 坏身 高台付	口縁部　1.5 高台径　11.0 高台高　0.6	外面　回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.3㎜) 黒色粒(0.1～1㎜)多い 灰白(Hue5Y7/1)	焼成不良 破片
64	9	須恵器 坏身 高台付	口縁部　2.0 高台径　12.8 高台高　1.0	外面　回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.3㎜) 灰白(Hue5Y7/1) 内部:浅黄橙色(Hue10YR8/3)	焼成不良 破片
64	10	須恵器 坏身 小片	口縁部　11.0 受け部外径　12.8 残存高　1.7	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～1㎜) 黒色粒子多い 内面:灰白(Hue7.5YR7/1) 外面:灰白(Hue2.5YR7/2)	
64	11	須恵器 坏身 小片	口縁部　10.6 受け部外径　12.3 残存高　2.6	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	黒色・白色粒子(0.3～2㎜) 灰白(HueN5/～N4/)に赤みを帯びる。 内部は灰(HueN7/)	
64	12	須恵器 坏身 小片	口縁部　13.0 受け部外径　16.0 残存高　1.5	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	黒色・白色粒子(0.3～1) 灰白(HueN7/)	
64	13	須恵器 坏身 小片	復元径　11以上 残存高　1.5	内面　回転利用の強い横ナデ 外面　底部中心付近:回転ヘラ削り 胴部付近:回転利用の横ナデ	黒色粒子　(0.3～0.5㎜) 白色粒子　(0.1～0.7㎜) 内：灰白(HueN8/) 外：灰(HueN5/)	
64	14	須恵器 坏蓋 小片	口縁部　10.0 かえり部径　8.0 残存高　1.3	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	雲母粒子,黒色粒子 白色粒子 灰白(HueN7/)	
65	1	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　19.4 残存高　2.9 受け部直径　17.6	外面　天井部上半:回転利用のヘラ削り 下半:回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(1～2㎜) 灰黄色(Hue2.5Y7/2)～ 灰白(Hue2.5YR7/1)	黒色粒子少量
65	2	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　17.0 残存高　2.3 受け部直径　15.6	外面　天井部上半:回転利用のヘラ削り 下半:回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～1㎜) 外:明オリーブ灰(Hue2.5GY) 内面:灰白(HueN7/)	黒色粒子少量
65	3	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　16.0 残存高　2.3 受け部直径　14.8	外面　天井部:回転利用のヘラ削りに横ナデ 端部:回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	黒色粒子(0.1～0.3㎜) 灰白(HueN7/)	
65	4	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　16.0 残存高　1.3 受け部直径　14.4	外面　回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～1㎜) 内面:灰色(HueN6/) 外面:灰白(HueN7/)	黒色粒子少量
65	5	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　14.0 残存高　1.7 受け部直径　12.4	外面　回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～1㎜) 内面:灰(HueN4/) 外面:灰(HueN6/)	黒色粒子少量 内面に自然釉あり
65	6	須恵器 坏蓋 破片	残存部径　14.6 残存高　2.0 つまみ直径　3.1	外面　天井部回転利用のヘラ削り ヘラ削りのあとに横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.3から1㎜) 黒色粒子(0.5㎜) 外:灰色(HueN5/) 内:灰色(HueN6/)	
65	7	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　16.5 残存高　2.0	外面　天井部:回転利用のヘラ削り 下半:回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.5㎜) 内面:灰色(Hue5Y6/1) 外面:灰色(HueN6/)	
65	8	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　16.6 残存高　2.0	外面　天井部:回転利用のヘラ削り 下半:回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～2㎜) 黒色粒子(0.1～0.3㎜) 内外面とも灰色(HueN5/)	

第25表　50区 SD01出土須恵器（蓋・高坏・甕・壺）観察表

図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土／色調	備考
65	9	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　15.0 残存高　1.6	外面　天井部:回転利用のヘラ削り 回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～1㎜) 黒色粒子(0.5㎜) 内外面とも灰色(HueN6/)	
	10	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　12.0 残存高　1.6	外面　天井部:回転利用のヘラ削り 下半:回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～2㎜) 黒色粒子(0.5～1㎜) 内:灰色(HueN6)	あらめの胎土 外:灰色(HueN5/)
	11	須恵器 坏蓋 破片	復元直径　12.0 残存高　0.9	外面　天井部:回転利用のヘラ削り 下半:回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～3㎜) 黒色粒子(0.1～1㎜) 灰色(HueN6/)～灰色(HueN5/)	0.1㎜が多い
	12	須恵器 坏蓋 破片	つまみ直径　3.3 残存高　1.4	内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.5㎜)雲母微少 灰褐色(Hue7.5YR5/2)	よりやや明るめ
	13	須恵器 坏蓋	つまみ直径　2.9 残存高　1.2	内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.2㎜)多い 灰色(HueN6/～N5/)	破片
	14	須恵器 坏蓋片	つまみ直径　1.9 残存高　1.3	内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.5～1㎜)多い 黒色粒子(0.5～1㎜)灰白(HueN8/)	あらめの胎土
	15	須恵器 坏蓋 破片	つまみ直径　6.2 残存高　1.3	外面　天井部:回転利用のヘラ削り 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.5㎜) 黒色粒子(0.3～0.5㎜) 内:灰白(HueN7/)	外:灰色(HueN5/) 輪状つまみ
66	1	須恵器 高坏 2/3残存	残存高　4.3 脚裾直径　10.6 脚部高　3.8	坏部　内外面:回転利用の横ナデ 脚部　内面は回転利用の削りに横ナデ 外面は回転利用のナデ	白色粒子(0.5～3㎜)多い 緻密な生地で非常にきめ細かい 暗青灰色(Hue5PB3/1)	器壁が非常に薄い 端部調整が鋭い 内部は暗紫灰色
	2	須恵器 高坏 坏部片	残存高　2.0 坏部径　13.4～	内面　回転利用の横ナデ 外面　脚部近くは回転利用の横ナデ 回転利用のヘラ削りに横ナデ	黒色粒子(1～2㎜) 白色粒子(0.1～0.5) 灰色(HueN7/)	
	3	須恵器 高坏	残存高　1.2 坏部径　7～	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	黒色粒子(0.5～1㎜) 白色粒子(0.2～0.5㎜)灰白色(HueN7/)	坏部片
	4	須恵器 高坏	残存高　2.6	内面　磨耗している 外面　磨耗している	雲母粒子　黒色粒子 白色粒子　灰白(Hue7.5Y8/1)	小型の高坏の脚部片
	5	須恵器 高坏 坏部片	残存高　2.7 坏部径　10.4	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.2～1㎜)多い 黒色粒子(0.3から1㎜) 雲母粒子　灰色(HueN6/～N5/)	坏部径が小さく, 脚部が高い 古墳時代のものか?
	6	須恵器 高坏 脚部片	残存高　6.2 脚部裾径　8.6～ 接合部径　3.7	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ ※内外面ともになでによる凹凸が残る	白色粒子(0.5～1㎜)多い 黒色粒子(1～3㎜)　多い 灰白色(HueN7/)	
	7	須恵器 坏部片	残存高　3.4 口縁部径　13.0	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.5㎜) 黒色粒子(0.3～1㎜)灰白色(HueN7/)	
	8	須恵器 坏部片	残存高　3.9 口縁部径　12.8	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.3㎜)石英 黒色粒子(0.3～2㎜)灰白色(Hue5Y8/1)	
	9	須恵器 坏(破片)	残存高　2.8 口縁部径　14.2	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	雲母　白色粒子(0.1～0.3㎜) 灰褐色(Hue5YR5/2)	
67	1	須恵器 甕 口縁部片	口縁部　19.0 頚部径　16.0 残存高　7.5	内面　同心円当て具痕跡 外面　格子目叩き痕跡 口縁部内外面:回転利用の横ナデ	黒色粒子(0.5～2㎜) 白色粒子(0.3～2㎜) 灰白(HueN8/)	外面:自然釉 肩の張りが強い
	2	須恵器 甕 口縁部片	口縁部　24.0 頚部径　18.4 残存高　3.2	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.2～1㎜)多い 黒色粒子(0.5～1㎜)多い石英 灰色(HueN6/)	
	3	須恵器 甕 口縁部片	口縁部　23.0 頚部径　20? 残存高　3.2	外面　回転利用の横ナデ 内面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.5～1㎜)多い 黒色粒子(2～3㎜)少々 黒褐色(Hue2.5YR3/1)	内面に自然釉 内部は赤灰 (Hue2.5YR5/1)
	4	須恵器 甕 胴下部片	残存高　11.0 胴部径　50.0	内面　同心円当て具痕跡 外面　格子目叩き痕跡	黒色・白色粒子(1～2㎜)多い 灰色(HueN5/～4/) 内面:灰白(HueN7/)	底面近くの破片
	5	須恵器 小型短頚壷 小片	口縁部　6.9 残存高　2.5	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	黒色粒子(0.1～0.3㎜) 内面:灰白(HueN8/) 外面:灰白(HueN7/)～灰(HueN6/)	
	6	須恵器 小型短頚壷 小片	口縁部　8.0 残存高　1.8	内面　回転利用の横ナデ 外面　回転利用の横ナデ	白色粒子(0.1～0.5㎜) 黄灰(Hue2.5Y4/1～5/1)	
	7	須恵器 壷肩部片 小片	残存高　4.6	内面　丁寧なナデ調整 外面　丁寧なナデ調整	白色粒子(0.1～0.5㎜)多い 外面:灰(HueN6/) 内面:青灰(5PB5/1)	非常に薄い仕上がり 内部は暗紫灰色 (Hue5RP4/1)
	8	須恵器 壷肩部片 小片	残存高　4.7	内面　ナデ調整 外面　回転利用の横ナデ後に凹線を施す。	黒色粒子(0.2～2㎜) 灰白(HueN7/)	表面部分的に灰 (HueN4/)

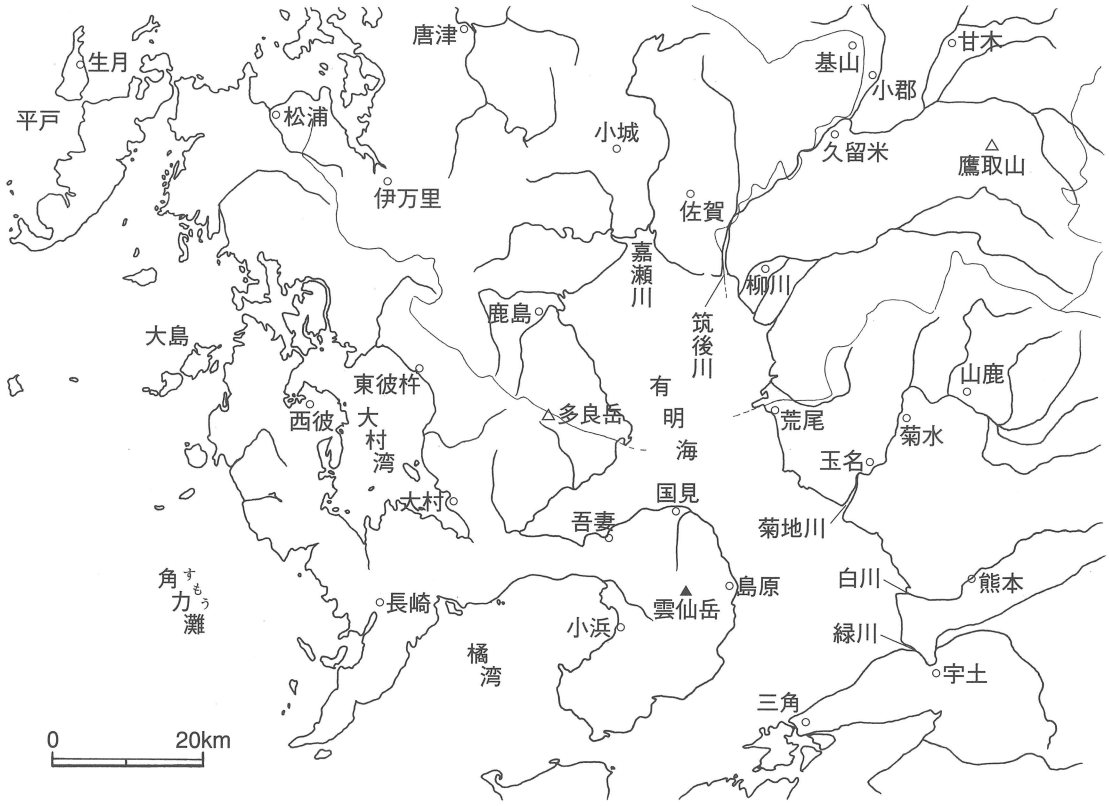
第５章　考　　察

第１節　十園遺跡出土須恵器について

はじめに

近年，島原半島において古代の土器流通に関する議論が筆者の周囲で盛んに行われている。特に奈良時代・平安時代の須恵器については，有明海を挟んだ荒尾市所在の古代窯址出土品との関連を追う議論が盛んである。最近の成果としては川口洋平氏の整理があげられる。（註１）川口氏は島原市稗田原遺跡（註２），有明町大野原遺跡（註３），松尾遺跡（註４），国見町石原遺跡（註５），大瀬戸町串島遺跡（註６）などの出土品に荒尾周辺の窯址資料と類似する点を指摘している。それらの遺跡から出土している蓋・坏・埦・甕・鉢などをとりあげ，技術的特徴と形態的特徴を整理し，荒尾市所在の窯址資料と類似することを指摘している。以降，島原半島においての公式な議論は見られない。近年では網田龍生氏の整理（註７）が挙げられる。有明海沿岸の肥後における窯址資料の整理が行われている。肥後では熊本県教育委員会による生産遺跡基本調査（註８）が早くから行われており，窯址のほかにも製鉄遺跡・製塩遺跡などの生産全般にかかわる基本的な資料が整理されている。肥前地域の３郡が含まれる長崎県でも，生産地関連の基本的な調査が行われることが望まれる。国見町が位置する高来郡を含め，長崎県内では須恵器の生産拠点についての分布調査がされておらず，その状況は不明な部分が多い。管見では須恵器窯跡は存在しない可能性が高いとしかいえない。しかし，その有無については遺跡台帳のみによる確認であるため，流動的な見解である。現存する風土記の一つである『肥前国風土記』記載の肥前３郡の所在する県としては，やはり生産遺跡関連の基本的調査が待望される。

本稿では，国見町内遺跡調査で得られた出土須恵器を中心に考古学的整理を行い産地に関する研究を行っていく。（註９）胎土分析の前提作業であることをことわっておきたい。



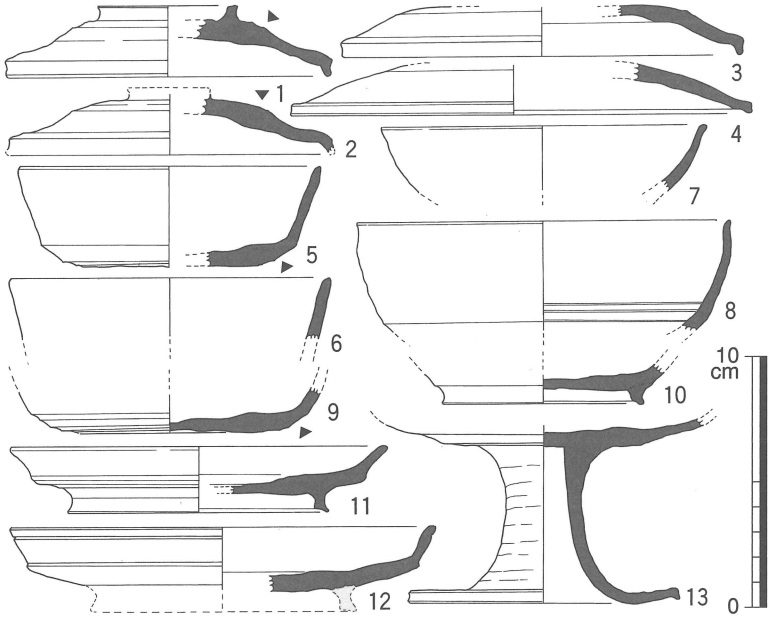
第68図　島原半島周辺の地域（1/1,000,000）

方法と資料紹介

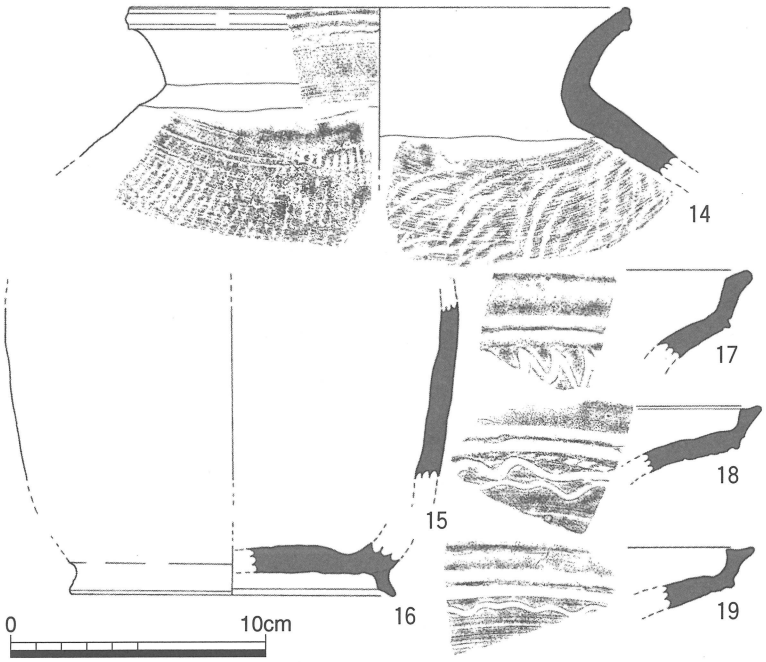
荒尾市所在の窯址群を含めた熊本県内における窯址の研究は古くから行われている。(註８）それらに関する最近の成果は，網田龍生氏の整理がある。(註７）荒尾市所在の窯址群と宇土半島基部所在の窯址群について，形態的・技法的特徴を整理し，九州各地で関連の指摘されている資料との比較を行っている。この他に，九州土器研究会等において，福岡県大野城市牛頸窯址群出土須恵器等も検討会が行われている。(註10）筆者はそれらの研究会等で，実際に窯址出土品を手にとって見る機会を得ているが，じっくりと見る機会は得られなかった。今回，胎土分析を行うに際して，荒尾市教育委員会より，皮籠田Ｂ窯址採集品の一部を提供頂き，じっくりとその特徴を観察する機会を得た。(註11）本稿では，特に荒尾市皮籠田Ｂ窯址出土品と国見町内遺跡出土品とを考古学的に整理し，類似する点と相違する点とを列挙していきたい。

１）生産地資料（荒尾市皮籠田Ｂ窯址出土品　第69～71図　第26表図版34）

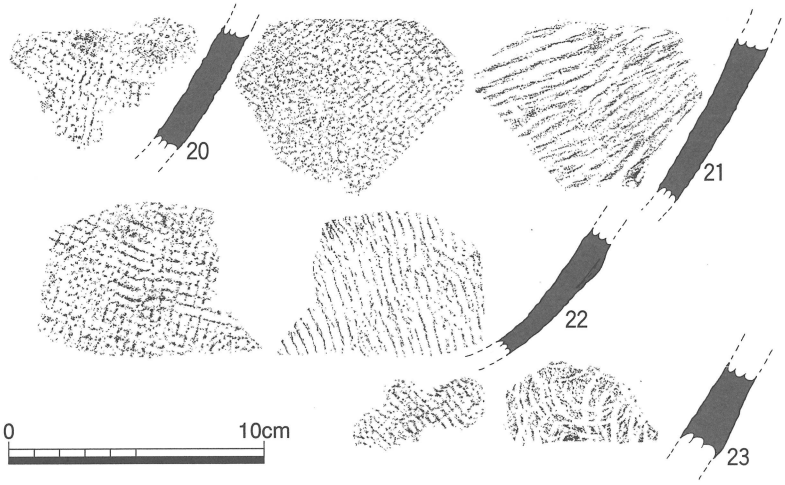
小代山西麓，浦川の支流である増永川上流域に皮籠田Ａ窯址と隣接している。調査は1995年に行われている。灰原から多くの須恵器が出土しており，器種は甕・壺・蓋・埦・坏・高坏・皿・盤などの生活什器一般がみられる。窯址の年代は八世紀後葉から九世紀前葉とされる。調査が行われた窯址は覆い屋が架けられ，住宅地の公園内で現地保存･公開がなされている。



第69図　荒尾市皮籠田Ｂ窯址表面採集資料(坏･類･1/3)



第70図　荒尾市皮籠田Ｂ窯址表面採集資料(甕類･壺類･1/3)



第71図　荒尾市皮籠田Ｂ窯址表面採集資料(甕類･1/3)

1～4は坏蓋の破片資料である。1と2は輪状つまみをもつものである。荒尾産須恵器の特徴として挙げられる形態的特徴は，天井部から体部にかけて施される回転ヘラ削りである。又，回転ヘラ削りを施しているが，天井部から体部への屈曲部分（▲）に厚みを残しているのも特徴的である。その特徴に加えて，端部にかけて器壁が薄くつくられることも注目すべきである。器の直径は13cm，16cm，19cm，の三種がある。輪状つまみの端部の仕上げは鋭いが，蓋端部の仕上げは丸みをもっている。

5～10は坏身の破片資料である。底から体部三分の一までは，丁寧に回転ヘラ削りを行っている。5と9の資料で見て頂きたいが，底部中心を非常に薄く仕上げ，その周辺は厚く，立ち上がりから口縁部にかけて徐々に薄く仕上げている。この器壁の厚みの偏り方は特徴的である。口縁部にかけての立ち上がりは単一ではなく多様な形態がある。口縁部直径は12cm，13cm，15cm，の三種がある。11～12は盤の破片資料である。底部外面には体部下半ぐらいまで回転ヘラ削りが施される。器壁は底部中心付近が非常に薄く，その周辺から体部までは厚くなり，口縁部は薄くつくられる。盤に限っては端部の仕上がりは坏などと比べるとより鋭い印象を受ける。口径には15cm，17cm，の二種がある。13は高坏である。体部上半は失われているが脚部は完存する。脚部は回転利用のヨコナデ仕上げである。坏部は底部外面が回転ヘラ削りを丁寧に施されている。器壁は坏や盤と同じく中心部は薄く周辺部は厚くつくられ，口縁部にかけては薄く仕上げられている。口径は13cm以上で，器高は脚高6.1cmで全高は7.5cm以上となる。

14～15は壺の破片資料である。14は胴部径18cm程に復元できる胴部片で，外面は回転利用のヨコナデ，内面は同心円当て具痕の上に回転利用のヨコナデがみられる。15は底部片で高台が付く。内面は同心円当て具痕が見られ若干のヨコナデが周辺部（胴部との接合部分）に加えられる。外面はヨコナデである。高台直径は13cmである。

16～19は甕の口縁部，20～23は甕の胴部の破片資料である。16は口縁部復元径約20cmの小型の甕である。外面肩部まで平行タタキ痕がのこり，頸部直下は丁寧なヨコナデ仕上げ，それより下は粗いヨコナデが加えられる。内面は肩部以下が同心円当て具痕，その上から口縁部まで回転を利用したヨコナデ仕上げとなる。形態は口縁部が短く，なで肩で肩の張りはほとんどなく胴部にいたる。口縁端部の仕上がりは比較的鋭い。17～19は上方へ屈曲する口縁部が特徴的な甕の口縁部片であり，外面には太いラインの波状文がみられる。口縁端部の仕上がりは比較的鋭く，稜線はしっかりつくられている。20～23は甕の胴部片で外面は擬格子叩き（3.8～4.0mm四方），内面は23のみ同心円当て具，他は平行当て具痕である。甕の特徴は口縁部と胴部との接合部分と内面の当て具痕にある。前者は接合内面に厚みのある部分を残し，その下を叩きしめている。焼き上がりでもこの部分は焼きぶくれが目立つ。内面の同心円当て具痕は，第71図23に示すようなもので，深みがあり重複する部分が多い。

2）国見町内出土品　（十園遺跡・倉地川遺跡・佃遺跡・石原遺跡・矢房遺跡）

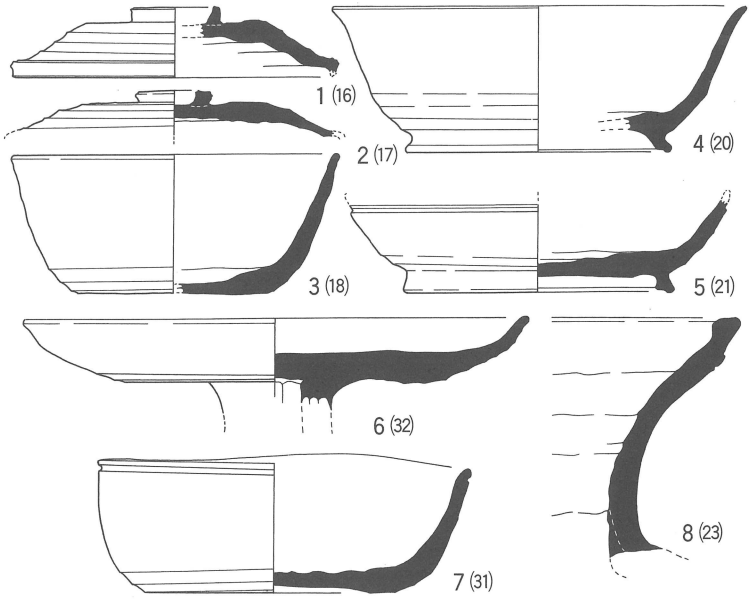
十園遺跡（註12）（第72・73図　図版35）

1～5・8～11は12～14区溝で検出された坏類・甕類である。6・7は大型の掘立柱建物群にかかわる資料である。

1・2は輪状のつまみをもった坏蓋で，直径が13～14cm，高さは2.8cmである。外面はにぶい赤褐色を呈し，内部まで完全に還元していない。外面には回転利用のヘラ削りを前面に施し，口縁端部近くは横ナデ調整を加えている。内面は回転利用の横ナデ調整である。3は深みのある坏で，器高5.6cm，口縁部直径は復元で13cmとなる。底面から胴部下半まで回転利用のヘラ削りが，それより上では回転利用のナデ調整がみられる。内面は回転利用のナデ調整である。外面には自然釉が多くかかる。

4・5は高台を有する坏で，4は深みがあり，5は浅めの器形になろう。4は器高5.8cm，口縁部復元直径16.5cmである。高台径は10.5cmで，端部内面に段をもち，接地面は高台でも周縁部のみとなる。外面には回転利用のヘラ削り調整が胴部下半にみられる。5は残存高3.6cm，高台径10.8cm，口縁部近くに凹線が一条みられる。口縁部は復元で15cm前後，器高は4cmほどか。外面には胴部下半に回転利用のヘラ削り調整がみられる。

1～5は体部形成が中央付近は薄く，胴部の立ち上がり付近が厚く，口縁部にかけては薄くなる共通した特徴を持っている。

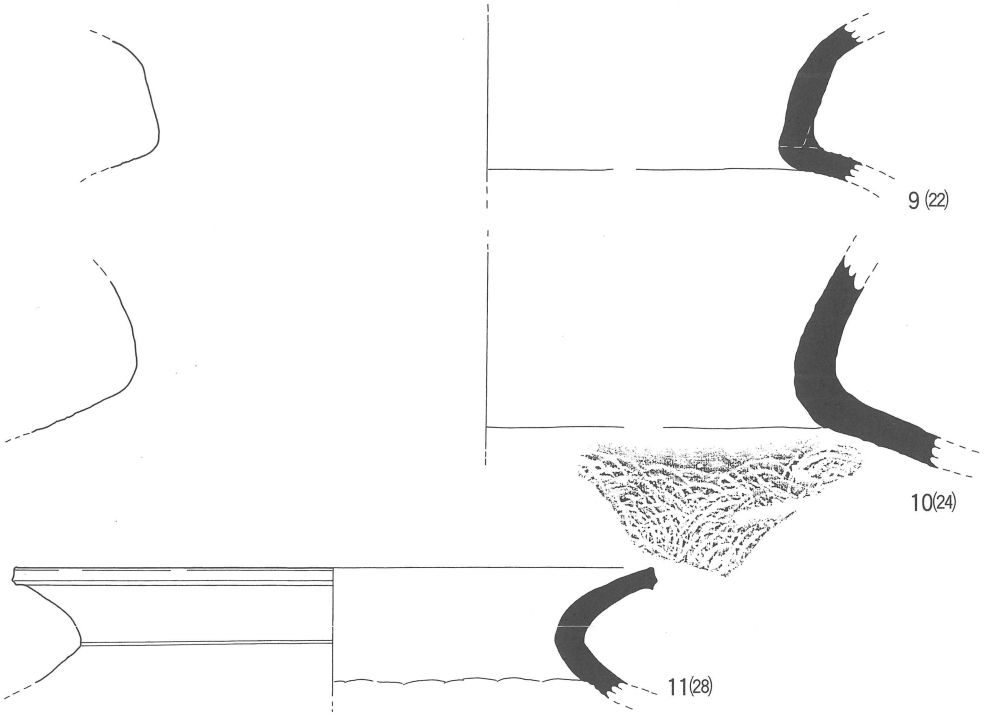


第72図　十園遺跡出土須恵器（坏類・甕類・1/3）

6・7は47区検出の大型掘立柱建物群のひとつ（4号建物新段階）であるP127の柱抜き取り穴から出土した高坏と坏である。6は高坏の坏部の接合品で，口縁端部が欠けるがほぼ全周する。口縁部直径は20cm，坏部高さ2.5cm，脚部直径は4.2cmほどである。外面は体部下半1／4まで回転利用のヘラ削り調整がみられる。それ以外は回転利用のナデ仕上げである。底面は厚く作られ器壁は1cmであり，口縁部は薄くなる。内部まで完全に還元していない資料である。7は焼けひずみがあり正円とならないが，口縁部直径はおよそ14cm，底部直径10.2cm，器高5.4cmである。胴部1／4程度まで底外面から回転利用のヘラ削りが続く。底面は中央が薄く作られ，ヘラ削りのあと中央部分のみナデが加えられる。接地面は中央以外の周縁部となる。

坏類の特徴として，体部下半外面の1／3～1／4まで回転利用のヘラ削りがみられること，底面の中央付近は薄くつくられ胴部の立ち上がりは厚くなり口縁部にいくにしたがい薄くつくられること，極端に薄く削られるものもあることなどが共通する。

8は前回の報告では壷としていたが，

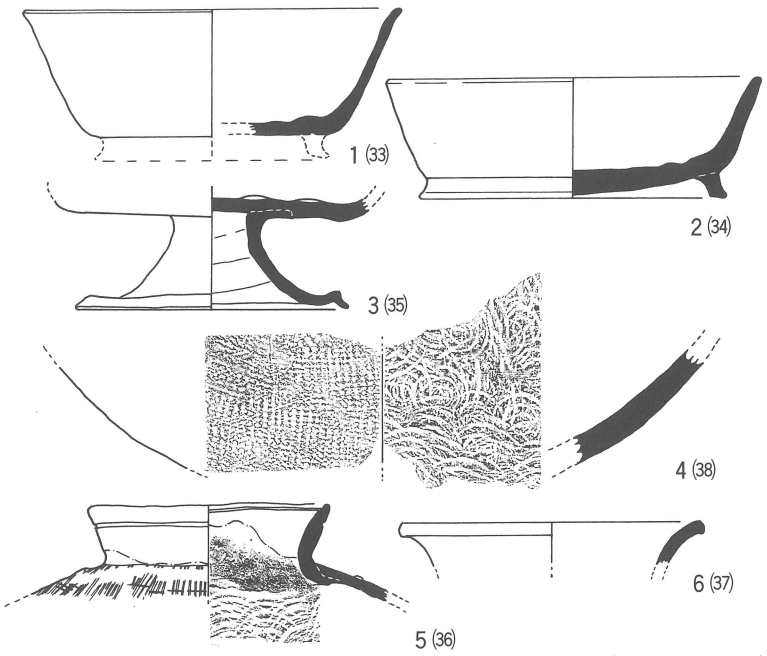


第73図　十園遺跡出土須恵器（甕類・1/3）

第26表　荒尾市皮籠田Ｂ窯址・倉地川遺跡・佃遺跡土器観察表

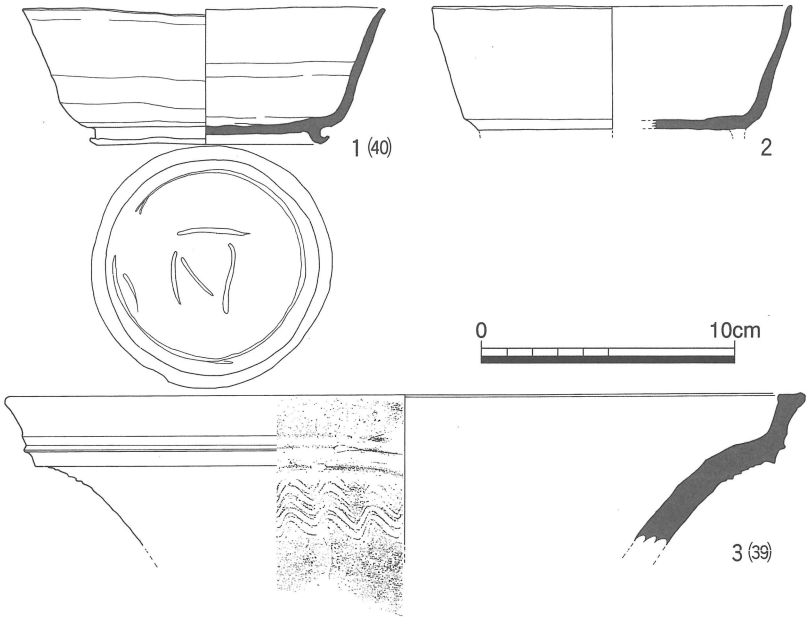
図	番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	色調	備考
69	1	須恵器 坏蓋 (輪状つまみ)	口縁部直径 12.8 器高 2.9	外面 上半:ヘラケズリ 下半:横ナデ 内面 横ナデ	灰黄(Hue2.5Y6/2)	自然釉かかる
	2	須恵器 坏蓋 (輪状つまみ)	口縁部直径 (復元径) 13 残存高 2.5	外面 上半:ヘラケズリ 下半:ヘラケズリに横ナデ 内面 横ナデ	にぶい橙(Hue5YR6/3)	
	3	須恵器 坏蓋	口縁部直径 16 残存高 2	外面 上半:ヘラケズリ 下半:横ナデ 内面 ナデ仕上げ	内面:黄橙(Hue7.5YR8/8) 外面:にぶい褐(Hue7.5YR6/3)	生焼成
	4	須恵器 坏蓋	口縁部直径 19 残存高 2	外面 上半:ヘラケズリ 下半:横ナデ 内面 ナデ仕上げ	灰(Hue5Y6/1)	自然釉
	5	須恵器 坏身	口縁部直径 12 器高 4	外面 上半:横ナデ 下半:ヘラケズリ 内面 横ナデ	にぶい褐(Hue7.5YR6/3～5/3)	自然釉かかる
	6	須恵器 坏身	口縁部直径 12～13 残存高 2.4	外面 横ナデ 内面 横ナデ	にぶい黄橙(Hue10YR6/3～6/4)	
	7	須恵器 坏身	口縁部直径 13 残存高 2.6	外面 横ナデ 内面 横ナデ	橙(Hue7.5YR7/6)	生焼成
	8	須恵器 坏身	口縁部直径 15 残存高 4.5	外面 上半:横ナデ 下半:ヘラケズリ＋ナデ 内面 横ナデ 凹凸が見られる	内面:にぶい黄橙(Hue10YR6/3) 外面:灰白(Hue5Y7/1)	
	9	須恵器 坏身	残存高 1.6	外面 上半:ケズリにナデ 下半:ケズリ仕上げ 内面 横ナデ	灰黄(Hue2.5Y7/2)	自然釉かかるが剥がれている
	10	須恵器 坏身 (高台付)	底径 8 残存高 1.6	外面 ヘラケズリ,横ナデ 内面 横ナデ	褐灰(Hue7.5YR5/1)と にぶい橙(Hue7.5YR6/4)との稿模様	
	11	須恵器 高盤	口縁部直径 15 器高 2.7	外面 上半:ヘラケズリ 下半:横ナデ 内面 横ナデ,回転利用仕上げ	灰黄(Hue2.5Y6/2) にぶい褐(Hue7.5YR5/3)	自然釉
	12	須恵器 高盤	口縁部直径 17 残存高 3	外面 ヘラケズリ,横ナデ ナデ仕上げ 内面 ナデ仕上げ	灰黄(Hue2.5Y6/2) にぶい褐(Hue7.5YR5/3)	
	13	須恵器 高坏	底径 10.9 残存高 7.3	外面 回転利用の横ナデ 内面 回転利用の横ナデ	灰(Hue7.5Y6/1) 灰オリーブ(Hue7.5Y6/2)	
70	14	須恵器 甕 (小さい部類)	口縁部直径 20 残存高 6.7	外面 回転利用の横ナデ 内面 同心円当具痕, その上から横ナデ	黄褐(Hue2.5Y5/4)に緑を加えたもの	自然釉かかる
	15	須恵器 瓶(胴部片)	胴部最大径 18 残存高 7	外面 横ナデ 内面 同心円当具痕に横ナデ	灰白(HueN7/)	
	16	須恵器 瓶(底部片)	底径 13 残存高 2	外面 横ナデ 内面 同心円当具の上からナデ	にぶい褐(Hue7.5YR5/4)	
	17	須恵器 甕	残存高 3.5	外面 波状沈線 横ナデ 内面 横ナデ	にぶい赤褐(Hue5YR4/3)～ 黒褐(Hue5YR3/1)	自然釉
	18	須恵器 甕	残存高 2.5	外面 波状沈線 内面 ナデ仕上げ	にぶい赤褐(Hue5YR4/3)	
	19	須恵器 甕	残存高 2.4	外面 波状文 内面 平行	にぶい赤褐(Hue5YR4/3)	
71	20	須恵器 甕(胴部片)	残存高 4.9	外面 格子(4㎜×3㎜) 内面 剥落	灰黄(Hue2.5Y7/2)	自然釉
	21	須恵器 甕(胴部片)	残存高 6.8	外面 格子(2.5㎜四方) 内面 平行	灰白(HueN7/)	
	22	須恵器 甕(胴部片)	残存高 5.2	外面 格子目タタキ(4㎜～3.8㎜) 内面 平行沈線当具	褐灰(Hue10YR6/1)	自然釉 未還元
	23	須恵器 甕(胴部片)	残存高 2.5	外面 格子(4㎜×3㎜) 内面 同心円	内面:褐灰(Hue10YR6/1) 内部:浅黄橙(Hue10YR8/3)	自然釉 未還元
75	1	須恵器 高台坏	口縁部直径 14.4 器高 5.4	外面 回転利用の横ナデ 底部:回転利用のヘラ削り 内面 回転利用のナデ	白色粒子目立つ 外面:赤灰(Hue2.5YR5/1) 内面:灰白(N7)	焼成良好 倉地川
	2	須恵器 高台坏	口縁部直径 (復元径) 14.6 器高 4.9	外面 回転利用のナデ 内面 回転利用のナデ 中心にかけて薄くヘラ削り	白色粒子極少 外面:赤灰(Hue2.5YR5/1) 内面:灰白(N7)	焼成良好 薄い仕上がり硬質
	3	須恵器 甕	口縁部半径 (復元径) 16以上 残存高 6	外面 自然釉 内面 自然釉	黒色粒子 外面:灰白(Hue7.5Y7/1) 内面:灰(Hue7.5Y6/)	粗目の胎土 佃遺跡

今回は甕として報告していく。30cm前後の口縁部直径となると思われ，頸部の高さは9.5cmほどである。不完全な焼成で完全に還元していないので，内部外面ともに灰黄色を主体とする。**9**・**10**は大型の甕，**11**は小型の甕である。**10**では内面の同心円文の密度が濃い点が特徴的である。甕については破片資料が多く完全な形に接合するようなものは出土していない。皮籠田Ｂ窯址資料と類似するか否かの判断が難しい。十園遺跡で出土している甕には多様な胎土や形態がみられるため，特徴的なものを中心に報告している。12～14区溝（SD01）でもコンテナ一箱ほどの甕の胴部片が出土しており，まだそのすべてについて整理を行っていない。そのなかでも共通した特徴を持つものを分類しその中から胎土分析の資料を選定していく方針である。



第74図　十園遺跡50区溝出土須恵器（坏類1/3・甕類1/4）

第74図は今回報告分の須恵器の抜粋である。**1**・**2**は高台を有する坏，**3**は高坏，**4**は大型の甕の胴部片（底部近く），**5**・**6**は小型の甕の口縁部片である。**1**は口縁部直径が約15cm，坏部の器高が５cm，高台直径は９cmとなる。外面には胴部１／４程度まで底面から回転利用のヘラ削りが続いている。口縁部端部にかけては非常に薄く作られている。**2**は口縁部直径14.6cm，器高4.8cm，高台径12cmである。胴部下半１／４程度までは底面から回転利用のヘラ削りが続いている。器壁は全体的に厚く，底部中央は１cm近く，口縁部にかけて薄くなる。焼成不良の資料で全体的に還元しておらず，にぶい赤褐色を呈する。**3**の高坏は器壁が非常に薄く焼成も非常に良いものである。脚部は完全にのこる資料である。坏部底面には焼け膨れがみられ，脚部裾にはひずみがみられる。胎土はキメ細かいが１～２mm大の白色粒子が目立つ。**4**は大型の甕の底部付近の資料である。外面は擬格子，内面は同心円の当て具痕がみられる。内面の同心円はそれほど密ではなく比較的浅く，その上から若干のナデがなされている。**5**は小型の甕の口縁部から肩部にかけての資料で，外面には自然釉がかかる。外面に



第75図　倉地川遺跡・佃遺跡出土品（坏類・甕類・1/3）

平行叩き，内面には同心円当て具痕がみられる。内面の当て具痕は比較的密であり深い。**6**は口縁部片である。これまでに町内で出土している甕の口縁部形態は，大型のものは第72図**8**のような端部が屈曲し頸部の長くなるものが多く，小型のものは第73図**11**や第74図**5**・**6**のように比較的な単純な口縁部を持つものが多い。また甕内面の当て具痕には深いものと浅いものとがみられ，同心円文と平行文との二種がみられる。

倉地川遺跡（第75図**1**・**2**　図版34・35）

倉地川遺跡は近年発見された遺跡である。国見中学校の所在する土黒地区の圃場整備事業により龍王遺跡の調査が行われているが，その南に隣接して発見された遺跡である。台帳には龍王遺跡（倉地川地区）と掲載される予定。第75図**1**はその圃場整備工事中に採集された須恵器である。口縁部を一部欠くがほぼ完全な形で残り，口縁部直径は14.4cm，器高は5.5cm，底部直径は約9.5cm，高台直径は９cmほどである。比較的体部の直立する深みのある資料である。特徴的な点は器壁が非常に薄い点である。全体的に３～２mmでそろえており，口縁端部は薄くなる。底面外面にヘラ描きが確認できる。**2**もそのときに一緒に採集されたもので，高台が剥がれている。反転復元で口縁部直径は14.6cm，坏部器高4.9cmである。**1**と同じく器壁が均等で非常に薄くつくられており，調整・技法・胎土などが類似する。これら二点と共通するのは第74図で紹介している十園遺跡50区溝出土の高坏である。

佃遺跡（第75図**3**　図版35）

荒尾市川籠田Ｂ窯址資料と共通する特徴をもつ大型の甕口縁部片である。口縁部は上方へ屈曲し，外面には特徴的な波状文が施されている。自然釉が外面にかかり，内部まで完全に還元している。内外面ともに回転利用の横ナデ調整である。口縁部外面の稜線は強くつけられている。遺構出土品。

石原遺跡（註５）（第76図）

島原半島の北側中央に位置する国見町は，有明海に北面する。その中央を流れる土黒川中流域に所在する複合遺跡である。2003年に報告書が刊行されている。そこで掲載された須恵器を紹介していく。**1**は高台を有する坏身でほぼ直立する口縁部を特徴とする。高台断面は正方形で低く，底面のみに回転利用のヘラ削りを施し，口縁部～体部は回転利用のナデである。**2**は無高台の坏身で，底面に回転利用のヘラ削りを施し，一部で体部下部までみられる。器壁はほぼ均等につくられるが，口縁部のみが厚くつくられる。**3**は盤で，高台を有する。全体的に鋭い仕上がりで，薄くつくられる。稜線もしっかりしている。**4**は鉢で低部を失う破片資料である。口縁部は内側へ内湾し「く」の字に外反している。外面には全体的に回転利用のヘラ削りを施し，上半は回転利用のヨコナデである。当資料は，川口氏により荒尾産類似品として挙げられた資料である。**5**は長頸壺胴部片である。内面は同心円当て具の上から回転利用のヨコナデを加えている。外面は上半が回転利用のヘラ削り，下半がヨコナデである。厚みのある資料で安定感があるかと思われる。

矢房遺跡（註５）（第77図）

石原遺跡の北に隣接する複合遺跡である。**1**～**4**は坏身の破片資料である。**1**～**2**は外にはる高台を有する坏身片で，低部と口径との差が多きい。調整は底部を中心二回転利用のヘラ削りが施されるが，体下部にまでみられる。口縁部から体部まで回転利用のヨコナデが丁寧に施される。**5**・**6**は壺の破片資料である。**5**は短頸壺の口縁部から胴部までの資料である。外面には二本の沈線帯がみられる。内外面ともに回転利用のヨコナデであるが，頸部接合痕が明瞭に残っている。**6**は瓶型長胴壺の胴下半の資料である。低部内面には同心円の当て具痕が残り，外面はナデ仕上げである。胴部外面は格子目叩きのあとにナデ調整，内面は指頭によるおさえ痕が残り，輪積粘土の接合痕も残る。**5**・**6**ともに荒尾産に類似する資料と思われる。

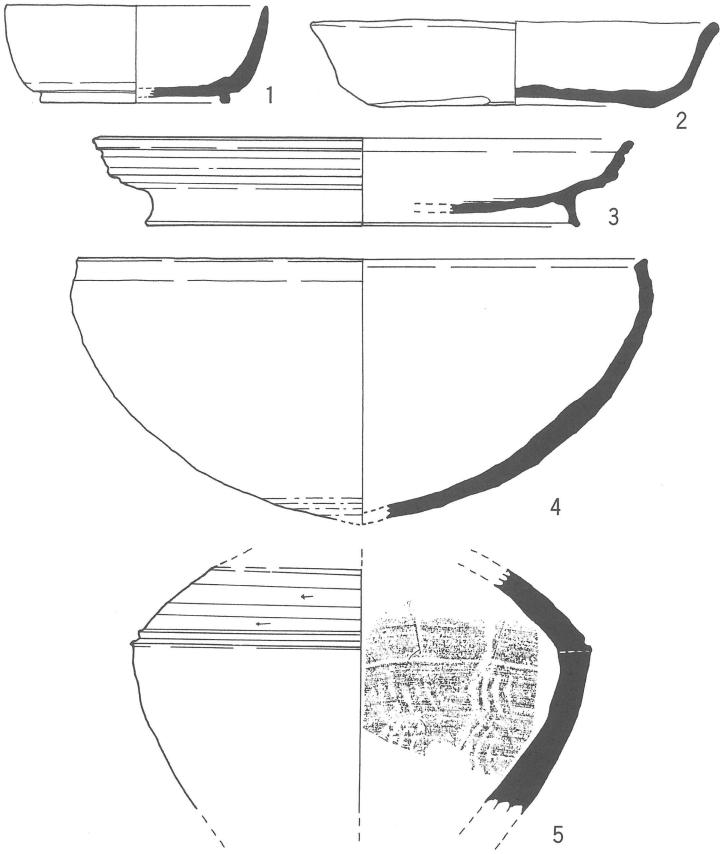
3）島原半島の出土品

吾妻町大園遺跡（第78図　図版33・34）

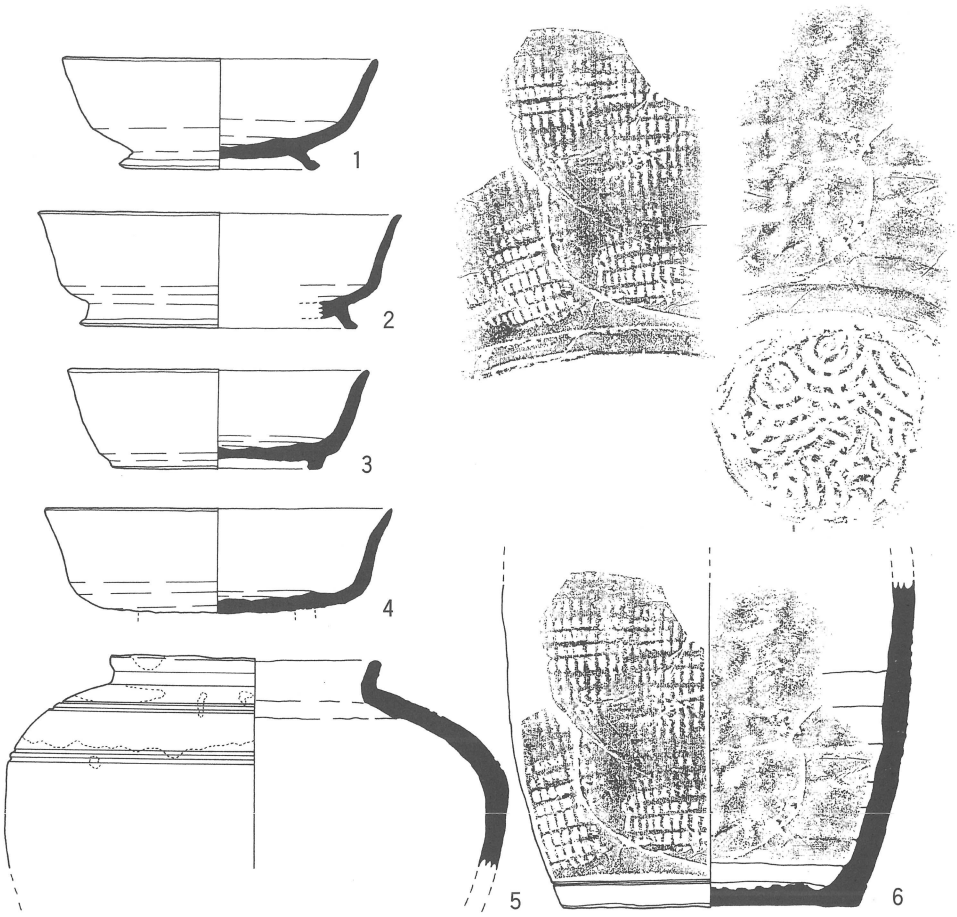
国見町の西にある吾妻町でも同時代の須恵器が発見されている。第78図の須恵器は圃場整備に先立つ確認調査で出土したもの。須恵器・土師器・黒色土器などが一様の高さで検出されており，なんらかの整地面と考えられる。

1は先ほど紹介した倉地川遺跡表面採集資料と類似する特徴をもつ。比較的薄い器壁で胎土には白色粒子が目立つ。報告書にある「器壁には空気が残ったため断面ははじけ，ふくらみ部が多く見られ形状もいびつである。」という表現はまさに倉地川出土品や十園遺跡50区溝出土の高坏にも当てはまる表現である。技法的にも類似する点が多いので共通した生産地である可能性が高い。**2**も同様である。**3**は佃遺跡出土品と共通する特徴をもち，第70図で紹介している荒尾市皮籠田Ｂ窯址の甕と共通した形態であり，技法である。これらも産地が共通するものと思われる。**5**は破片資料による復元実測であるが，内面の当て具痕が特徴的である。上半は同心円文，下半は平行文となっている。同様なものは有明町大野原七反畑遺跡出土品でもみられる。（註3）

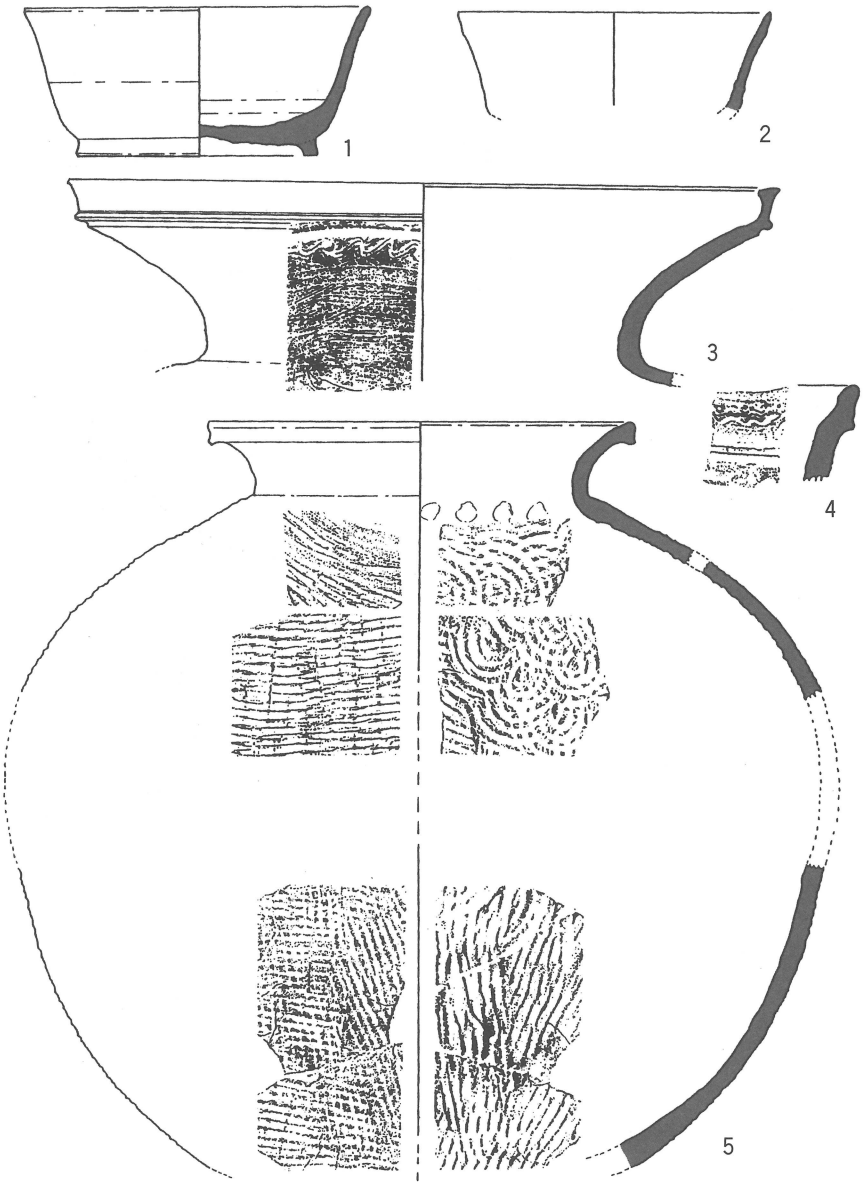
報告書には「本



第76図　石原遺跡出土須恵器（1/3）



第77図　矢房遺跡出土須恵器（1/3）



第78図　吾妻町大園遺跡出土須恵器(1/3)

遺跡の出土甕などに最も近い窯は，荒尾市周辺の荒尾窯跡群があげられるが，なかでも川登の暁町窯のものと類似するが，それによると第Ⅷ様式での800年前後の年代観である。」とある。この視点は注目すべきであり，報告書段階ですでに小代山周辺との関係を指摘していたものと考えられる。

ま と め

以上六遺跡の資料を検討したが，図示したものの中では第72図の**6**・**7**そして第73図**3**，第76図**4**，第77図**5**・**6**，第78図**3**などは荒尾市周辺の窯址出土品に類似する特徴をもっているのではないだろうか？今後，胎土分析や資料収集を行い研究を深化させていきたい。

註

1　川口洋平「長崎県出土の荒尾産須恵器について－九州土器研究会（熊本）から－」『西海ニュース』第20号2000西海考古同人会
2　川口洋平『稗田原遺跡Ⅳ』長崎県文化財報告書第157集2000長崎県教育委員会
　川口洋平『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財報告書第152集1999長崎県教育委員会
3　諫見富士郎『概要報告書　大野原七反畑遺跡』有明町文化財調査報告書第10集1993長崎県有明町教育委員会
4　安楽勉他「松尾遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅺ』長崎県文化財調査報告書第91集1988長崎県教育委員会
5　竹中・辻田『石原・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第３集2003長崎県国見町教育委員会
6　宮崎貴夫『串島遺跡』長崎県文化財報告書第51集1980長崎県教育委員会
7　網田龍生「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」先史学・考古学論究2003龍田考古学会
8　松本健郎他『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県文化財基本調査報告第48集1980熊本県教育委員会
9　本稿は『国見町出土遺物の産地に関する研究』の一環として行っていく。研究の深化や資料の整理などを行う予定であり，本稿はその一部である。
10　舟山良一「牛頸窯跡群出土須恵器」九州土器研究会発表資料2000年７月22・23日大野城市まどかぴあ
11　資料提供には荒尾市教育員会の勢田廣行氏・吉田政博氏のご協力を得た。また，荒尾市教育委員会の調査による皮籠田Ｂ窯址資料も実見させていただいた。両氏のご協力に感謝申し上げます。
12　竹中・辻田『十園遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第４集2004国見町教育委員会

第２節　奈良・平安時代の溝・掘立柱建物

はじめに

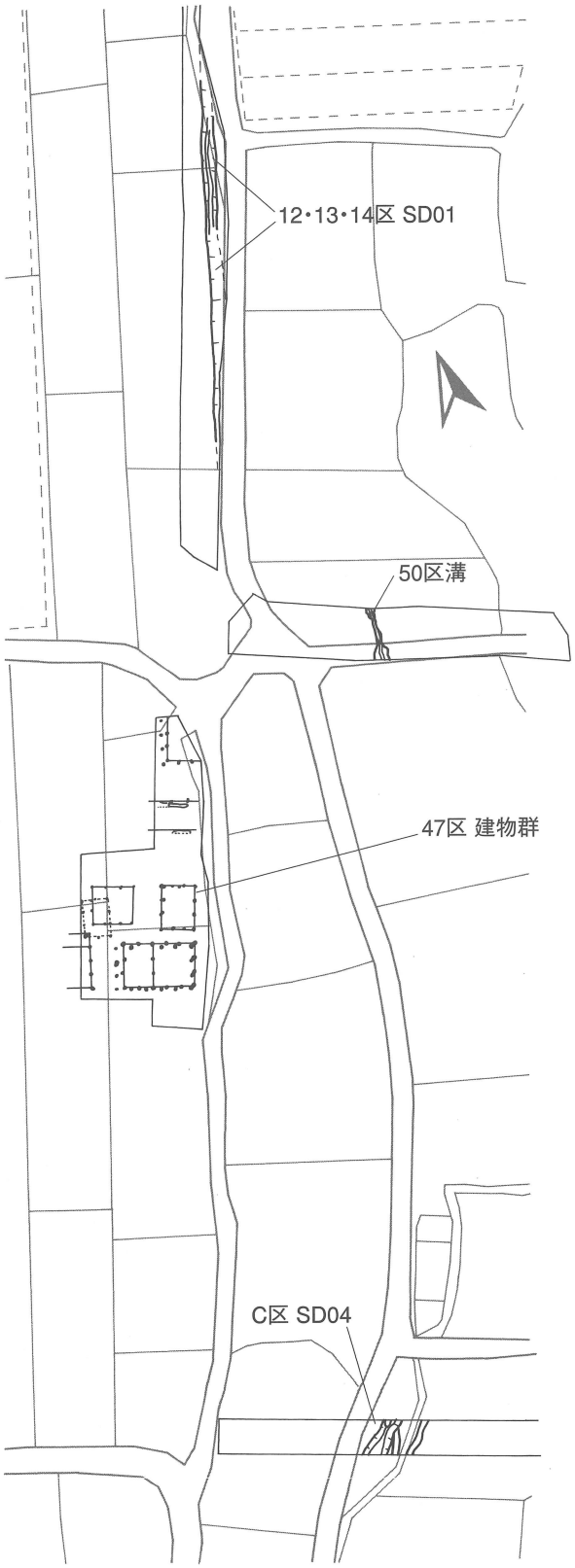
50区検出の溝が新たに加わり奈良・平安時代関連の遺構は，溝２条，自然河川２本，掘立柱建物群，条里遺構となった。それらについて，報告者の現在の見解を整理しておきたい。各遺構の時期的な問題を整理するためには，各遺構の切り合い関係が良好になることが望まれるが，今回の報告までにそのような調査には恵まれなかった。そのため，出土遺物の整理を中心に各遺構の所属する時期について整理し，十園遺跡での奈良・平安時代の状況を簡単に復元してみたい。

土師器坏の問題

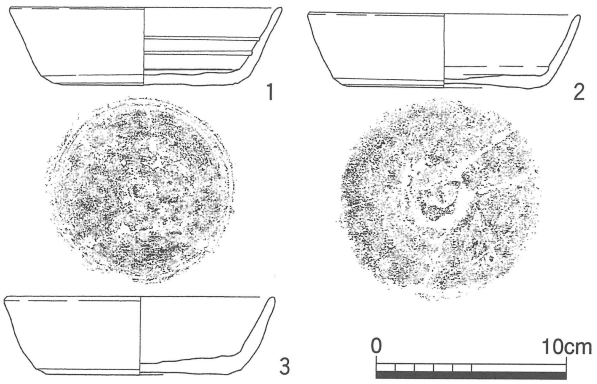
前回の報告でも整理しているが，十園遺跡では土師器坏が大量に出土している。

まず，挙げられるのが第80図に示すような，口縁部直径14.5cm，器高4.1cmのものである。これら３点は，旧河川際に一直線に並べられていたものと思われ，河川や水にかかわる祭祀色の強い出土状況である。類似品は７世紀末から８世紀前半までの須恵器を大量に出土している有明町大野原遺跡（七反畑地区）廃棄土坑の出土品に見られる。また，老司系瓦を大量に出土している国見町五万長者遺跡では，祭祀土坑から１点の出土がある。また，十園遺跡のすぐ南にある小中野Ａ遺跡でも溝から２点の坏が高台の付くタイプととも溝に投げ込まれたような状態で，いずれも破片資料であるが出土している。これらの特徴は底部の仕上げが，回転利用のヘラ削り後にナデをかるく施している点である。このため，このタイプの坏は年代的には８世紀代中ごろまでの実年代が想定できる。

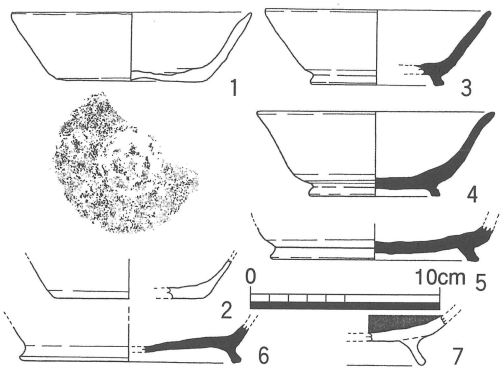
次に多いのが，第81図１にあげるような，口縁部直径12.9cm，器高3.7cmのものである。十園遺跡Ｃ区SD04出土品は半分ほど残る資料であるが，底部は回転を利用したヘラ切りのあとを軽くなでるのみで仕上げている。端部はシャープにつくられ，底部も薄く作られている。これとほぼ同じ法量のものは，第82図に示すように12～14区SD01で多量に出土している。ここでは底部の厚みが不揃いで，厚いものや第81図のように薄いものまでさまざまなものが検出されている。しかし，法量はほぼ一致してくるので，さほど器形にバリエーションが生まれる一群ではない。しかし，底部の



第79図　50区溝・12～14区溝・47区建物群(1/1,000)



第80図　35～36区自然河川際祭祀遺構出土品(1/4)



第81図　C区 SD04出土土器(1/4)

調整は回転を利用したヘラ切り離しの後に丁寧にナデが加えられるもの，ナデが施された後に板状工具で押さえつけるものも見られる。このように同じ法量でも底部の調整や底部の厚みに違いがみられるため，同一の形式に収めてよいものか疑問が残る。これらの坏については，共伴して出土している土器から年代を検討せねばならないであろう。

第82図**8**～**11**は高台の付くタイプの土師器片であるが，これは比較的高い高台にその上から直線的に広がる体部形態であることがわかる。深みも十分ある形態に復元できる。**15**～**44**の須恵器は蓋・坏ともにバリエーションが豊富であるが，直径が13cm以下のものが多く，８世紀代後半から９世紀代にかけての資料と思われる。

第82図**12**～**14**は黒色土器であるが，丸い体部に復元でき，口縁部が外に反る特徴を持っている。比較的厚みがなく，高台もそれほど高くない。黒色土器の良好な資料は国見町では出土していないが，吾妻町大園遺跡で出土している。大園遺跡出土品は第83図**9**であるが，９世紀後半の特徴を持っており，同様な法量の土師器坏を出土している。また，土師器皿も出土し，さらに須恵器坏・甕も出土している。土師器坏・皿については，形態的な特徴や技法的な特徴が共通しており，同一の製作者集団によるものと思われる。須恵器については報告者により，800年前後の年代が想定されており，黒色土器の年代を加味すると，これらの土器は９世紀代全般の年代が想定される。

また，島原市稗田原遺跡では，８世紀代後半の特徴を持つ須恵器と第82図**1**～**6**と同じ法量の土師器坏とが旧河川から発見されている。底面はいずれもヘラ切り離しであるが，口縁部から体部にかけての調整が若干異なっている。凹凸が残るように強いナデ仕上げのもの，体部下半にまでヘラ削りが及ぶものなどが見られるものなど，横ナデ仕上げで十園遺跡出土品に近いものもあり，調整で見るとバリエーションに富む状況である。

これらの土師器坏は，一括性に乏しい出土状況であるが，ある程度長い期間に共通した法量のものが利用されていたと考えておきたい。実年代としては８世紀後半から９世紀代全般にあり，10世紀代まで存続した可能性が高い。十園遺跡では坏のみの出土がみられるが，大園遺跡では土師器坏と皿とが確認されており，９世紀代には皿を加えた祭祀形態に変遷しているものとも考えられる。

掘立柱建物・溝の年代差（第79・84図）

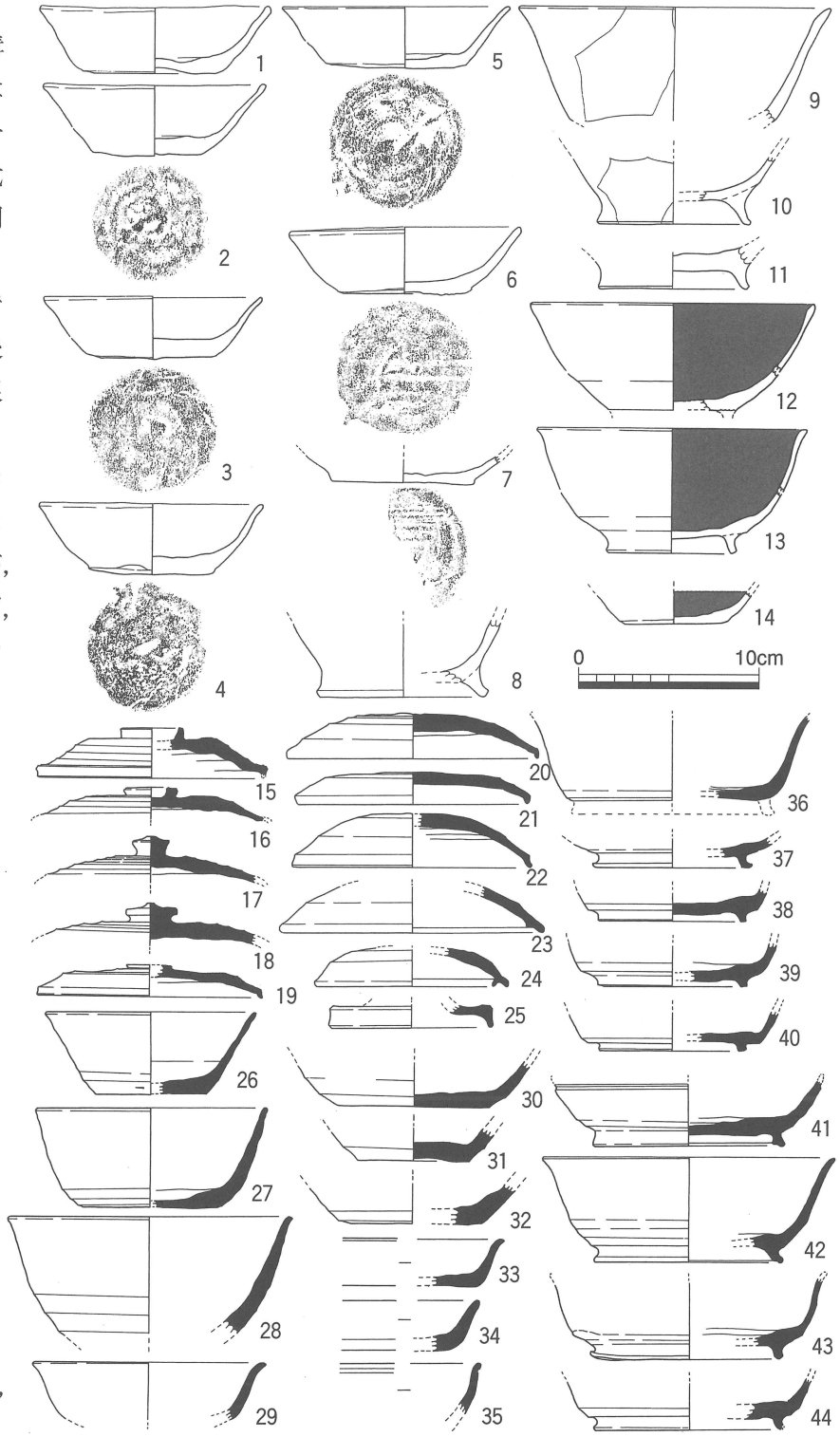
掘立柱建物の柱抜き取り穴で検出された土器群には，ミガキのある土師器や底部にやや丸みの残る須恵器などが含まれており，有明町大野原遺跡（七反畑地区）廃棄土坑と同様な年代が想定できる。50区溝で検出された土器群は，ミガキのある土師器に加え，返りのある須恵器坏蓋などが多く出土している。本書66ｐ第61図**1**に示したような土師器坏は丸い底部で，口縁部が外反する特徴を持っている。これらの土器は７世紀末から８世紀前半代に特徴を持つ土器群であり，50区溝は掘立柱建物群の

建造とほぼ同時期に掘られた溝である可能性が高い。50区溝は中位まで自然に埋没した後に一気に埋められており，その年代は掘立柱建物の柱抜き取り時期に一致するものと考えられる。

次に，12～14区溝出土品でもっとも古い須恵器は８世紀後半代の特徴を持つもので，上限年代は上記の坏の整理にもあるように10世紀代までと考えておきたい。12～14区溝の覆土には一様に褐色砂が堆積していたが，一気に堆積したとは考えられず，徐々に埋まっていったものと考えておきたい。50区溝の上部に新しく掘られた広い溝は，12～14区溝と同様な時期に掘られ，同様な状況で埋没したものと考えられる。

旧河川の埋没は第80図にしめすような土師器が３個体並べ置かれた上に砂が堆積しており，その堆積土には弥生土器などは含んでいるがほかの遺物をまったく含まなかったので，これもゆっくりと堆積していったものと考えられる。

さて，このように整理してくると８世紀前半代に五万長者遺跡に連動するように官衙関連集落として開発された十園遺跡は，８世紀代後半以降には官衙的な機能が想定できなくなる。

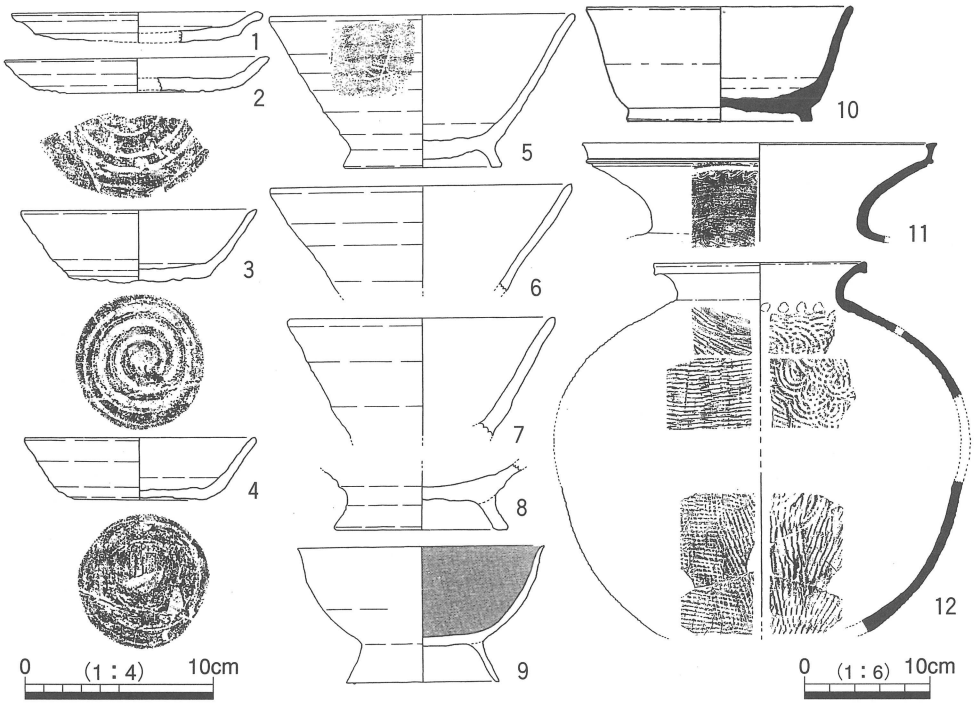


第82図　12～14区 SD01出土土器(1/4)

しかし，再び12～14区溝のようなしっかりとした水路が掘削されているので，遺跡内で中心的な建物の移動があったものと考えておきたい。９世紀代以降に十園遺跡がどのような性格の集落となったのかは，今後の調査成果を待ちたい。

十園遺跡出土土器の年代観

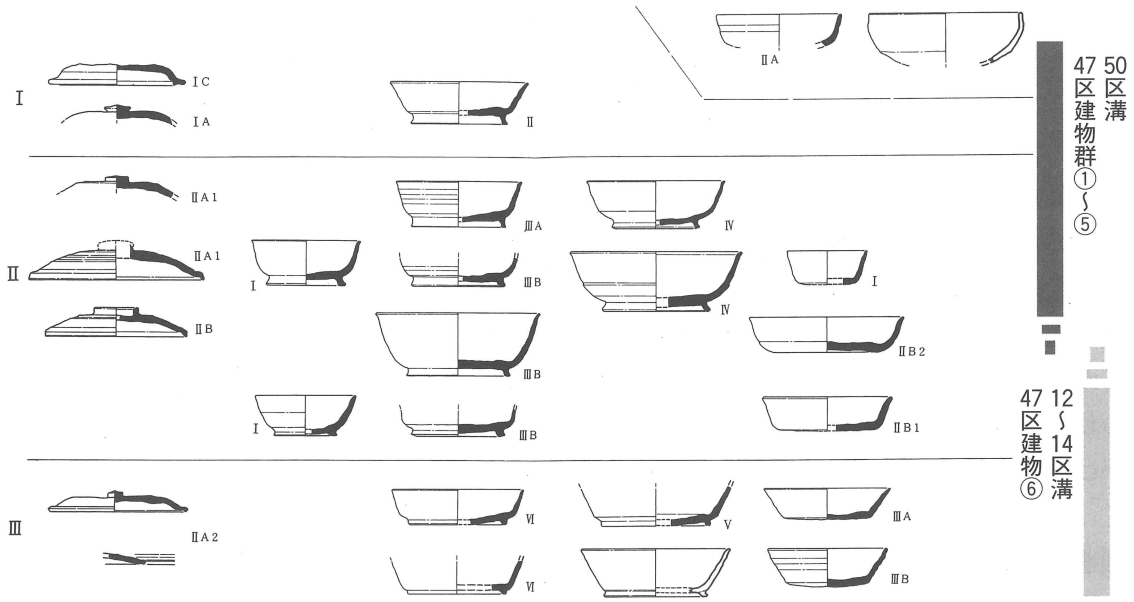
十園遺跡からはたくさんの遺構と出土品がみられる。それらのすべてを検討していないが，ここで



第83図　吾妻町大園遺跡出土土器(1/4・1/6)

それを整理しておきたい。第84図は大瀬戸町串島遺跡で宮崎氏が提示した編年案である。暫定的にこれを用いて十園遺跡ついてのイメージを持っていただきたい。Ⅰ期はおおよそ７世紀後半代を，Ⅱ期は７世紀末から８世紀前半代を，Ⅲ期は８世紀中ごろ以降をそれぞれ中心とする年代観がある。47区掘立柱建物群と50区溝は掘削年代が限りなく７世紀後半代にちかく，建物の建替えなどを経て，建物解体と溝の埋没はⅡ期にあるものと思われる。12～14区溝とそれと方位が一致する建物⑥は同一時期と考え，その掘削・建造はⅡ期にあり，その埋没はⅢ期以降になると思われる。今後，十園遺跡出土品などを中心とした土器群の編年作業が期待される。

主要参考文献
竹中・辻田『十園遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第４集2004国見町教育委員会
諫見富士郎『概要報告書　大野原七反畑遺跡』有明町文化財調査報告書第10集1993長崎県有明町教育委員会
安楽勉他「松尾遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅺ』長崎県文化財調査報告書第91集1988長崎県教育委員会
竹中・辻田『石原・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第３集2003長崎県国見町教育委員会
宮崎貴夫『串島遺跡』長崎県文化財報告書第51集1980長崎県教育委員会



第84図　大瀬戸町串島遺跡出土土器編年表(1/8)